

2 各 論

(1) 青森県の野生生物の概要

本州の北端に位置する青森県は津軽海峡をはさんで北海道に対峙する。この海峡は狭いところでは20kmほどの距離しかないが、新生代第四期の初期に陥没によって形成されたといわれており、生物の移動拡散には大きな障壁となってきたと考えられる。

平野部の地形は傾斜0～3度の平坦地が県土面積の17.3%をしめており、わが国の平均14.0%を上回る。山地部は、中央に八甲田山地・十和田山地など、奥羽山脈につらなる山地群があって県を東西に二分している。また東側には下北山地・田子山地などが、西側には出羽山地からの延長にあたる白神山地や岩木山地・津軽半島山地などがあって地形を複雑なものにしている。これらの山地は、岩木山の標高1,625mを最高に1,000m前後のものが多いが、緯度が高いので高山性の生物が頻繁に現われる。

十和田湖をはじめ、小川原湖・十三湖・宇曽利山湖・十二湖などの湖沼や大小600を超える溜池群、南北八甲田山地域に点在する高層湿原群、岩木川・馬淵川をはじめとする大小の河川などの水域も多い。それらは、県土の約4%を占めており、各種の水生生物が生育している。三方海に囲まれ、さらに内湾としての陸奥湾をかかえていることもあって、本県の海岸線の延長は700km余りに達する。

生物の生活に大きく影響する気候は、大別すると太平洋側がオホーツク気団による表北日本型、日本海側がシベリア気団による裏北日本型で、二つの気候型が複合している特徴がある。具体的には、太平洋側は春季から夏季に低温多湿な偏東風（俗称やませ）の影響をうけて比較的冷涼、冬季は小雪、晴天が多いのに対し、日本海側は夏季が比較的温暖、冬季は季節風が強く、多雪で曇天が多い。

植物分布上、青森県はブナやミズナラを主体とする落葉広葉樹林帯（ブナ帯ともいう）に位置している。本県のブナは今では山地帯に限ってみられるが、かつては海岸地域にも生育していた。例をあげると、太平洋側東通村海岸に広がる猿ヶ森周辺のクロマツ林は往時ブナ林であったとされているし、日本海側つがる市のベンセ海岸には約1,400年前のブナ生育を証明する花粉分析の結果が報告されている。これら平地のブナ林は人間生活の営みと共に次第に伐採が進み、その結果、現在残っているブナ林は多くが奥山の山地帯に限られ、大部分が国有林として管理されている。青森県の森林面積は約64万haであるが、そのうちブナ林は10万ha余におよび、世界自然遺産に指定された白神山地の一部も含まれる。ブナ林の中に生育している木本・草本類は、太平洋側と日本海側では主としてその気候環境の違いから大きく異なっている。とりわけ林床に生えるササの種類に違いがみられ、太平洋側ではスズタケやチマキザサがまばらに見られるだけなのに、日本海側ではチシマザサが圧倒的に多い。しかも、チシマザサと同じように多雪環境に適したほふく型の常緑性の低木であるハイイヌガヤやヒメアオキ・エゾユズリハなどが多く、混交している針葉樹もヒバ（ヒノキアスナロ）などで、太平洋側にみられるマツ科木本より弾力性があり、雪に対する適応性がみられる。

消雪直後から若葉が芽吹く頃のブナ・ミズナラ林の林床は非常に明るい。このわずかの期間に地上に届く光を最大限に活用して生きているのがカタクリやキクザキイチリンソウなど、北国の早春を象徴する植物群である。

ブナ林と並んで8万9千haの生育面積をもつヒバ林も青森を代表する樹木で、県の木に指定されている。全国の80%が本県に生育しており、下北・津軽両半島にその中の90%が分布している。陰湿な林床はヒメホテイランなどの希少種を育む環境となっている。なんとといっても多いのは20万haにおよぶスギ林で、そのほとんどが人工林である。生育状態によって異なるが、混交または下生する植生は単純である。

変化に富んだ植生を背景に、動物相も多様である。北海道とつながっていた寒い時代に南下した動物の一部は、本州北端の高標高地などにとどまって生息しているし、津軽海峡の成立にはばまれて本県を北限

の生息地として落ちついた種類も多い。津軽海峡はブラキストンによって提唱された動物地理学上の一つの境界線として知られ、ブラキストン線とよばれる。主として哺乳類と鳥類の分布から唱えられたといわれるが、ほかの動物群についても適用されるケースが多く、本県の動物分布を論じるときには無視できない学説となっている。「純淡水生カニの世界の北限（サワガニ）」や「ヒト以外の霊長類の世界の北限（ニホンザル）」などは、その最たるものであろう。サワガニやニホンザルが長い歴史を背負いながら県内に生息を続けていることは、地質学的事実を抜きにしても、それらの生物にとって生活環境の好適さと持続性を表徴しているものといえる。

本県における近代的な野生生物研究の流れをみると、1934年和田干蔵が初代会長となって青森県博物研究会（事務局は青森県師範学校博物学教室）が設立され、「青森博物研究会会報」、「青森博物研究会時報」を発行して1940年頃まで本県の生物調査に重要な役割をはたした。戦後、1956年郡場寛を初代会長に青森県生物学会が設立された。この会は事務局を弘前大学文理学部生物学教室に置き、「青森県生物学会誌」を28巻（1992年）まで発行したが、その後自然閉会した。間もなく、1995年福田進を初代会長に「青森自然誌研究会」が設立され、事務局は青森県立郷土館学芸課に置かれている。会誌「青森自然誌研究」は1996年の創刊号以来毎年発行され2009年には第14号に達している。青森県立郷土館は1973年に創立され、自然・民族・考古・歴史の各部門において幅広い調査・研究活動を展開して「青森県立郷土館調査研究年報」（2009年の33号から青森県立郷土館研究紀要）を毎年刊行し、自然部門関係では県内の動植物相・分布にかかわる数多くの報告がある。さらに2004年、牧田肇を初代会長に弘前大学白神研究会（事務局は弘前大学農学生命科学部内）が結成され、会誌「白神研究」は2009年には第6号を迎えた。これらの組織だった活動母体のほかに、地域ごとあるいは専門分野ごとに研究会・同好会・団体などがあって会報発行や情報交換をおこなっている。それらのなかには、1964年の創刊以来40数年にわたって「月刊津軽植物」（2010年は第47巻）を発行している津軽植物の会、1978年の創刊以来30年余にわたって会報「Celastrina」（2009年は第44号）を発行している津軽昆虫同好会などもある。いずれにしても、今日の青森県における野生生物研究は、県内各地で多年地道な活動を続けてこられた個々の研究者の熱意と努力に負うところが大きい。

「青森県史 自然編 生物」（2003）はそれまでの県内におけるさまざまな分野の野生生物研究の成果が集大成された内容となっている。そこでは、本県の風土と生物研究、多様な生物相、生物の地域性、人々のくらしと生物、生物相の保全などの項目について、多くの研究者が分担して過去の知見を整理し、現状を分析し、課題を探り、将来の展望を探る試みがなされた。そして、当時の分担者の多くが今回のレッドデータブック改訂にも関わった。

さまざまな生物の生育状況を末永く維持することを一つの目的として、県内には各種の法令による指定地が多い。ユネスコによる世界自然遺産およびラムサール条約の登録湿地、国立・国定公園、県立自然公園、国や県の自然環境保全地域などであるが、県土に占めるこれら地域の面積は全国でも上位にある。しかし、好ましいことだけではない。本県でも環境の悪化によって姿を消さざるを得なくなった動植物も多く、今、われわれは大いに自省し、対策を考えるべきである。

こうした現実を直視し、今後の展望を模索する際の手立ての一つとして利用できる、敢えて言えば"自然との共生"を模索するために役立つことを希ってこの本はできた。本書の有効な活用を期待する。

（奈良典明・原田幸雄・小原良孝・山田雅輝）

(2) 植物

1) 維管束植物

①概説

維管束植物は体中に維管束（茎・葉・根などの器官を貫き養水分の通路となる条束状の組織系）を有する植物の総称で、羊歯植物、裸子植物、被子植物を包含する。このうち羊歯植物は一般に胞子によって殖えるので孢子植物、裸子植物と被子植物は種子によって殖えるので種子植物とよばれることもある。

これまで青森県内全域を対象にした維管束植物の目録には村井（1939, 1941）の「青森県博物総目録：植物の部」があり、ここには変種や品種も含め合計3,229の分類群が記録されている。その後およそ半世紀経て、角田（1978-1990）は京都大学所蔵の標本ほか記録や観察に基づき「青森県産植物抄録I-XII」を発表した。続いて細井（1994）の「青森県野生植物目録」が発行されたが、ここでは変種や品種を整理し合計2,485の分類群が掲載されている。さらに、近年白神山地など県内の植物が専門家によって詳しく調査され、新分布、分類学的の所属の変更（学名の変更）、いくつかの新種の記載が相次いでいる。

「青森県の希少な野生生物-青森県レッドデータブック-」（2000）、さらに「青森県の希少な野生生物-青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）-」の出版後、専門家や県内の研究者、ナチュラリストの活躍で新たな確認種や新分布の情報が蓄積された。前回のレッドデータブック（2000）の維管束植物の掲載種は253種であるが、今回の改訂版（2010）では57種増えて310種となった。カテゴリごとの変動をみると、AおよびBランクでそれぞれ60および29種増加する一方、Dランクが37種減少していることが注目される。要するに、情報不足種（Dランク）の他ランクへの振り分けと新たな希少種の追加が大きく影響している。ただ、ごく最近本県から新種発表された植物は、調査期間の関係で今回の検討対象になっていないものがある。

およそ2,050種と見積られる県内の維管束植物は垂直分布で海中・海岸・湖沼・低湿地・海岸林・海岸岩石地・海岸草原・平地・山地・高山とさまざまな環境に適応して生育している。それぞれの植物種はお互いに種間や種内に生存競争を繰り返しながら共存共栄しているのがふつうであり、ただ一種だけで極端に大きな群落をつくることはない。そしてそこにはそれらの植物を利用する数多くの動物や菌類が生存している。これがいわゆる種の多様性といわれる自然界の基本的な姿である。

人間の営みが自然環境を破壊して野生生物のすみかを奪う結果を招くことも多い。例えば、陸奥湾の東津軽郡側の海岸はコンクリートによる広範な護岸工事で砂浜が失われ、海浜植物群落の多くが姿を消した。街中では帰化植物のセイヨウタンポポやアカミタンポポがはびこり、本来のエゾタンポポは郊外で細々と生き延びている。高山では過剰な登山者による高山植物の踏みつけや盗掘さえも懸念されている。これらの問題に適切に対処するためには、多くの市民が自然環境の大切さや自然生態系の意味をよく理解することが第一である。最近、河川工事地域からの希少植物の移植、フクジュソウ産地における実生繁殖試験、異常繁殖したアレチウリやオオハングンソウの駆除作業、植物保護地域や景勝地におけるボランティア活動など、自然生態系の保護に向け官民さまざまな取り組みが報じられているのは喜ばしい傾向である。

豊かな自然は貴重な国民の財産である。生物多様性・遺伝資源の保存、教育・科学研究の素材、文化・風習などの面からも、植物資源は今後いっそう重要性が認識されるだろう。市民への自然保護思想の教育と普及が強く求められている。このような状況下で、レッドデータブックは実際に活用され、また将来の指針となりうる有益なものでなければならない。専門家、研究者、地域のナチュラリストのいっそうの連携・協力が必要である。

(原田幸雄)

②本文

双子葉植物合弁花類 ヒシモドキ科

E X

和名 ヒシモドキ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Trapella sinensis* Oliver

[形態的特徴] 「日本水生植物図鑑」(大滝・石戸, 1980) 22頁の水草、水辺環境に線画がある。

[選定理由] 初記録以来報告が見られない。

[分布と生態の概要] 北限種。本州(青森県、秋田県、宮城県、山形県他)・九州、朝鮮・中国に分布し、国内では絶滅生育地が多くなった。

[特記事項] 県内では栃木県の古瀬義(カセ ヨシ)がつがる市(旧木造町)武田の田光沼(タツピヌマ)で採集した標本を国立科学博物館主催の第22回おしぼ展(1956)に出品した。現在は河川改修工事のため自然度の高い沼地は失われている。

長尾(1978)は花期が7~9月として記録している。「秋田県植物分布図2000」では、八郎潟の南の潟上市(旧昭和町)付近に一か所記録されている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 タヌキモ科

E X

和名 フサタヌキモ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Utricularia dimorphantha* Makino

[形態的特徴] イヌタヌキモやタヌキモに似て葉が房状なことから房狸藻と名付けられた。捕虫のうが少なく着くことと、葉の先端に2、3の短い刺があることがもっともよい特徴である。鈴木(1978)は「同定自信なし」と断っているが、革秀寺の池で採集した植物の立派な線画を残し、貴重な記録である。

[選定理由] 弘前市革秀寺の池のみが現在記録が残された唯一の産地であるが、生活排水が流れ込み絶滅したと考えられる。

[分布と生態の概要] 日本特産で、本州のみに記録されている。小宮(1995)は全国の詳細な分布を調べたが、現存しているのは2~3か所であると述べている。角野(1994)も分布図を出しているが、いずれも本県は抜けている。

[特記事項] 杉本(1965)は「…本(青森~近畿)池沼…」と青森県を記録しているが県内のどこかは分からない。標本の所在も確認できない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

E X

和名 ヤナギタウコギ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Bidens cernua* L.

[形態的特徴] 葉が単葉で頭花の辺花は舌状花となる。

[選定理由] 佐藤耕次郎(1943)の大正年代の採集記録以降には不明となり、多産地であった尾上町(現平川市)の猿賀池は改変されて絶滅したと見られる。

[分布と生態の概要] 本州(青森)・北海道・北半球北部に分布し、県内は猿賀池のみが知られていた。

[特記事項] 岩川友太郎が平川市(旧尾上町)猿賀神社の池でとった標本(Aug. 22. 1880)が東京大学に残されている。これを松村(1886)が取り上げ、Nakai(1939)も引用した。佐藤耕次郎は着色写生図を残し、これは県立郷土館に入っている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 スイカズラ科

E X

和名 ハナヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera maackii* (Rupr.) Maxim.

[形態的特徴] 山地に生える落葉小高木。他のヒョウタンボク類は低木であるので見分けられる。樹皮は縦裂してはがれる。葉は長さ5～8 cm、卵状長楕円形で、先は鋭くとがる。花はスイカズラに似ており、白色から橙黄色に変わる。花期6月上旬。果実は球形、2個合着せず、赤熟する。

[選定理由] 県内唯一の産地階上町に隣接する岩手県洋野町・軽米町に小群が残っており、その生育環境を参考に調査を行ってきたが、開田やスギ植林地化などで生育適地はほとんど残っていない。発見から100年以上報告がないことから絶滅したものとする。

[分布と生態の概要] 本州（青森・岩手・群馬・長野）、朝鮮・中国（北部）・アムール・ウスリーに分布する。県内では階上町階上岳に産することが知られていた。牧野富太郎が山崎良甫の採集した標本に基づいて、1903年（明治36年）日本に産することを初めて発表したものである。生育地は明るい谷川のほとりから谷頭の落葉広葉樹林である（根市, 2007）。（根市益三）

単子葉植物 オモダカ科

E X

和名 トウゴクヘラオモダカ

環境省：絶滅危惧類

学名 *Alisma rariflorum* Samuelsson

[形態的特徴] 薄葉（1986）によれば、花期は7～9月で1日の開花数は1株当たり通常2～5個で多くとも10個以内（ヘラオモダカは10～30個）、開花時間は14～19時で午前中には咲かない（ヘラオモダカ11～16時）、花弁は大きく6～7 mm、弁の辺縁に粗大鋸歯がある（ヘラオモダカは半分位で鋸歯は目立たない）、花序の第一節目の枝数は通常2本（ヘラオモダカ3本）と差がある。

[選定理由] フォーリーが1898年に八戸で採った標本以外の記録はなく、絶滅したと考える。

[分布と生態の概要] 本種の生育地は自然度の高い湿地で、普通種ヘラオモダカのように水田や水路には出ない。

[特記事項] 日本固有で関東に分布の中心があり、本県が北限であるが、フォーリー以外いまだに採集記録がない。（細井幸兵衛）

単子葉植物 カヤツリグサ科

E X

和名 カンエンガヤツリ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cyperus exaltatus* Retzius var. *iwasakii* (Makino) T. Koyama

[形態的特徴] 本種は1 mにも達しそう生する大形なもので、県内には他に間違える種類はない。

[選定理由] この大形な植物は井上（1971）の記録以降全く見つからない。絶滅したものとする。

[分布と生態の概要] 基本種はインドからインドネシア、オーストラリアと特異な分布域を持ち、国内のカンエンガヤツリはその変種と考えられ、元は朝鮮から持ち込まれたものらしい。本州の北中部に分布し、関東に産地が多い。

[特記事項] 古瀬（1954）は上野の国立科学博物館主催の第20回腊葉公開陳列会（1954）につがる市（旧木造町）館岡で採集した標本を出品し、東京・埼玉・茨城に次いで青森県が第4の分布地として知られるようになった。

古瀬は、つがる市（旧車力村）の田光沼の岸に生えていて、古老の話によればこれで筵をあんたとしてある。井上（1971）も「……昔はどンドンこの植物をふやし、この茎でゴザを編んだものだ……」と述べている。つがる市館岡の田圃のあぜ道には1980年頃まであったようである。

（細井幸兵衛）

和名 タチガヤツリ

環境省：絶滅

学名 *Cyperus diaphanus* Schrader

【形態的特徴】 普通種のカワラスガナによく似ていて、外観だけでは区別しにくい。果実の表面の細胞配列は、カワラスガナではやや円い六角形だが、タチガヤツリは縦長に短冊状である。

【選定理由】 フォーリーが青森で採った古い標本以外の記録はない。

【分布と生態の概要】 本州・小笠原、朝鮮・中国（東北）・アムールに分布する。

【特記事項】 Ohwi (1943) は京都大学のフォーリー採集標本中に青森産のものを見出し発表した。それにはAomori (Faurie sin. num.) とあり、標本番号と採集年月日不明である。大井は青森と小笠原にまれに生えるとしたが、後に栃木県で見つかっている。

(細井幸兵衛)

シダ植物 ヒカゲノカズラ科

A

和名 スギラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lycopodium cryptomerinum* Maxim.

[形態的特徴] 主に樹上に着生する常緑性シダ。生育地では落葉広葉樹上にスギの小枝が突き刺さっているように見える。茎は叉状に分岐し、県内のもは全長10～20cmくらいの個体が多い。葉は密生し、線状披針形、長さ1～2cm。

[選定理由] 本種は全国的にも珍しい種であること、また、着生に適する落葉広葉樹の伐採が深山にまで及び、急激に減少していることから、生育地の確認や保護策に緊急を要する種である。

[分布と生態の概要] 北海道（東部）から屋久島、朝鮮（済州島）・台湾・インドに分布する。県内では津軽半島・白神山地他のブナ帯のトチノキ・サワグルミ・ブナなどの落葉広葉樹の大木に着生していることが多い。空中湿度、着生木の樹皮の状態他の微妙な生態的条件が分布を左右しているようで、県内での報告例はきわめて少ない。近年の山岳域の大規模な伐採が本種の分布に大きなダメージを与えている。

(齋藤信夫)

シダ植物 ヒカゲノカズラ科

A

和名 チシマヒカゲノカズラ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lycopodium alpinum* L.

[形態的特徴] 高山に生える小型の常緑性シダ。茎は主軸が地上を這い側枝は直立し、高さ5～10cm。葉は4列に並び2形で、腹面の葉は背面の葉より短い（類似種タカネヒカゲノカズラは同形の葉が5列に並ぶ）。

[選定理由] 希産で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、北半球の温帯に広く分布する。県内では八甲田山と岩木山に産し、タカネヒカゲノカズラよりはるかに少ない。

[特記事項] 環境省のリスト（2007）では、ミヤマヒカゲノカズラとチシマヒカゲノカズラを統合しているのでここではそれに準じた。

(細井幸兵衛)

シダ植物 キジノオシダ科

A

和名 キジノオシダ

環境省：該当なし

学名 *Plagiogyria japonica* Nakai

[形態的特徴] 地上生の常緑シダ。葉は単羽状でそう生し、栄養葉の葉身は長さ30～50cm、幅15cmほど。孢子葉は栄養葉より長く、羽片は線形となる。

[選定理由] 東北地方では極めて少ない。県内分布記録は1936年の“西郡”がある。しかし、その後は長らく確認されていなかったため、不明種扱いされていた。1994年1月に深浦町黒崎地区で確認された。しかし、本種の生育分布は局限され、個体数も少ない。

[分布と生態の概要] 分布は中国大陸と朝鮮半島の済州島と日本。日本では、関東及び北陸地方から西が分布の中心。県内ではスギとミズナラやトチノキが混交している林下に少数株が生育している（佐藤, 2001）。

[生存に対する脅威と保存対策] 林床をつくっている樹木が伐採されると、環境変化が急激に起こって、短時間で絶滅してしまうと考えられる。

[特記事項] 青森県北限植物。

(木村啓)

シダ植物 チャセンシダ科

A

和名 チャセンシダ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Asplenium trichomanes* L.

[形態的特徴] 岩の割れ目などに生える常緑性シダ。そう生し、葉柄は紫褐色で光沢がある。葉は単羽状につく。小葉が落ちた細い葉柄が沢山残るので、茶筌（せん）にみたてて名付けられた。

[選定理由] 乱獲により激滅している。

[分布と生態の概要] 北海道（西南部）・本州・四国・九州、世界の温帯から暖帯に広く分布する。東北地方では本県だけに産し、東通村尻屋の石灰岩地に見られるだけである。

[生存に対する脅威と保存対策] 乱獲の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

シダ植物 ハナワラビ科

A

和名 アカハナワラビ

環境省：該当なし

学名 *Sceptridium nipponicum* (Makino) Holub

[形態的特徴] フユノハナワラビに似た冬緑性シダ。栄養葉の羽片の裂片は鋭鋸歯縁（フユノハナワラビは鈍鋸歯縁）。冬季に葉が紅変する特徴がある。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では三沢市六川目に産する。林下に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要である。

[特記事項] ヤマハナワラビ・エゾフユノハナワラビ・フユノハナワラビとの雑種もあるようで、小型な変種ウスイハナワラビも含め、もっと調査すべき種である。

(細井幸兵衛)

シダ植物 ハナワラビ科

A

和名 イブリハナワラビ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Sceptridium microphyllum* Sahashi

[形態的特徴] アカハナワラビに似た冬緑性シダ。栄養葉の葉身は小さく長さ4 cmぐらい。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）に分布する。県内では下北半島東通村猿ヶ森付近の林下で採集した標本を中村武久が同定した。

[生存に対する脅威と保存対策] 開発・採取等の危険性がある。

[特記事項] 北海道胆振地方で見つかったのものでその名がある。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 タデ科

A

和名 コガネギシギシ

環境省：該当なし

学名 *Rumex maritimus* L.

[形態的特徴] 海岸や内陸の砂地に生える1年草または越年草。翼状萼片に長い刺毛があるので、成熟した果実があれば他に間違える種類はない。果実の色からコガネと形容された。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、欧州・シベリア・モンゴル・中国北部・ロシア東部地方に分布し、本州では八戸のみであったが、最近むつ小川原港建設に伴う掘削残土堆積地に出現し数年で消滅した。しかし、米倉浩司が六ヶ所村尾駮沼付近で見出し、県内で確実な産地が確認された。

[生存に対する脅威と保存対策] 生態を明らかにして対策を考える必要がある。

[特記事項] 松村（1912）はMutsuの産と記録しているが、詳しいことは分らない。八戸市鮫海岸で山田玄太郎が1912年（明治45年）に採集した標本が岩手大学農学部に残されているという。佐藤（1943）は津軽雑草図説に本種の果の図を残している。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 タデ科

A

和名 ヤナギヌカボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Persicaria foliosa* (H. Lindbarg) Kitagawa

[形態的特徴] 自然度が高い水湿地に生え、ヤナギタデよりも軟質で葉が細い。

[選定理由] 個体数が減少傾向にある。

[分布と生態の概要] 県内では佐藤（1943）が写生図を残し「山野ノ沼沢地、溜池ノ底、水湿路傍、湿潤ノ畑地等ニ発生。溜池ニ発生スルモノハ長期間水中ニ沈生スルモヨク生存ス。貯水池雑草ノ著シキモノナリ」とあるが、今日では絶滅に近い。

[生存に対する脅威と保存対策] 生息地の環境維持を計る。

[特記事項] 村井（1936）・菊地（1967）・Mizushima & Mori（1958）が記録している。その後、各地で見出された。本種の等価基準標本Sept. 1903 TI-Syntypeは木梨延太郎が青森で採ったものである。近年は低湿地の生育池が開発で激滅している。青森市大野の標本（Oct. 24, 1955）の生育地は消失したが、この個体は下半分が倒伏して上半分が立ち上がり高さ15～20cmで分枝しない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ナデシコ科

A

和名 エンピセンノウ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lychnis wilfordii* (Regel) Maxim.

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ50～80cm。葉は対生し、狭長卵形。花は緋赤色で、花弁の先は燕尾状に細裂する。花期は8月上旬。類似種フシグロセンノウは林縁などに生え、花が大きくてくすんだ朱赤色、花弁は裂けない。

[選定理由] 生育地は現在陸・海上自衛隊の基地となっている。かつての生育地であった辺りには木本類の進出が目立ち、2003年の立入り調査では植生遷移が進行し、個体数がきわめて少なくなっている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・埼玉・山梨・長野）、朝鮮・中国（東北部）・ウズリーに分布する。県内では八戸市北沼に産することが古くから知られている。沼の周辺、背後の段丘および斜面の湿地に、サワギキョウ・タチギボウシなどと共に生育していたが、現在は段丘状の湿地にわずかに残っているだけである。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 ナデシコ科

A

和名 クシロワチガイソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pseudostellaria sylvatica* (Maxim.) Pax

[形態的特徴] エゾフスマに似た外観で葉が狭く、最下の葉が小さく、閉鎖花をつけ、根は太い。

[選定理由] 特殊な限られた環境に分布し、希産である。

[分布と生態の概要] 北海道でも産地は少なく、本州では栃木県と岩手県北上山地に産することが知られているに過ぎない。東シベリア・朝鮮・中国（東北地方）・ウスリー・アムールに分布する。県内では白神山地の尾根すじの半陽地に生育する。青森・岩手両県では花崗岩類の風化土にのみ分布する。

[生存に対する脅威と保存対策] 乱獲の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ナデシコ科

A

和名 チシマツメクサ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Sagina saginoides* (L.) Karsten

[形態的特徴] ツメクサに似てやや肉質。小花梗は花後に曲がって、果時には再び直立する。

[選定理由] 国内では北アルプスと北海道に離れて分布していて、途中に岩木山だけ杉本（1965）によって記録されている。

[分布と生態の概要] 北半球に広い分布域を持ち、寒地や高山に生える。国内では高山の岩隙や砂礫地の陽地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 目立つ花でないが、マニアの乱獲から守りたい。

[特記事項] 杉本（1965）の記録以来、岩木山頂一帯から再確認の報告がない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ナデシコ科

A

和名 イトハコベ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Stellaria filicaulis* Makino

[形態的特徴] 茎は四角で細く、そう生し、糸のように伸び、高さ30～80cm。葉は対生し、線形で長く尖り、長さ1～4cm、幅1～3mm。葉質は薄く、無毛。花は白色5弁で長さ6～8mm、深く2裂し、花柄の頂につく。花弁は萼の1倍半長。萼片は披針形で先は鋭頭。

[選定理由] 本州の仙台や関東平野の低湿地だけでまれに見られる種類であったが、1976年6月につがる市（旧車力村）の低湿地で発見され新記録となった（木村, 1976, 1977）。この地点以外では確認されずに現在に至っている。

[分布と生態の概要] 世界的な分布は日本及び朝鮮半島と中国東北部の低湿地。つがる市（旧車力村）での分布は、広い低湿地の中でも一地点に限られ、個体数は少ない。長年、この湿地が開墾されず辛うじて生存している。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿原植物は環境変化に大変敏感で、開墾などの人手が加わると一瞬にして絶滅してしまうと考えられる。地権者と話し合っって早急な保護対策が必要である。

[特記事項] 発見時の標本は、東京大学植物標本庫に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 ナデシコ科

A

和名 エゾハコベ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Stellaria humifusa* Rottb.

[形態的特徴] 塩性湿地に生える多年草。茎は基部が這い、直立して高さ5～10cm。葉は狭長楕円形で鋭頭、質やや厚くて無毛。花は葉腋につき、花柄の長さ1～3cm。花期6月下旬～7月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。生育地の尾駱沼周辺は、近年原子力関連の開発が進んでおり、海岸・湿原開発のいかんによっては消滅の危険性が大きい。現在の生育状況から、環境が維持されれば繁殖の可能性もある。本州では貴重な北方塩性湿地植物群落全体の保存を考える必要がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、北半球北部に分布する。県内では六ヶ所村尾駱沼河口部南岸に発達したウミミドリ・ヒメキンボウゲ・エゾツルキンバイ・オオシバナ・ヒライなどからなる塩性湿地植物群落中に、局所的に小面積で生育している。本州唯一の産地で南限である。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 アカザ科

A

和名 ミドリアカザ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Chenopodium bryoniaefolium* Bunge

[形態的特徴] 高さ1m以下の草本。シロザに比べて葉柄は長く葉は三角状ないし菱状卵形で先は鋭形、基部は広くさび形、花序はまばらに花をつける。

[選定理由] 希産種で開発により減少している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、アジア東北部に分布する。全国的に希産である。県内では三戸町目時に産する。八戸市南郷区の新井田川沿いにも見られたが、ダム建設により水没した。イワアカザともよばれ川沿いの岩石地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 開発に当たっては十分留意すべきである。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 アブラナ科

A

和名 タカネゲンバイ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Thlaspi japonicum* H. Boiss.

[形態的特徴] 草丈15cmほどの小型多年草で、根生葉は有柄で楕円形をし、茎葉は卵形で茎を抱き、左右が矢尻形に張り出している。花は白色4弁で果実は軍配形となる。

[選定理由] 日本では北海道だけに知られていた種類であったが、1998年6月に深浦町の吾妻川上流で発見され、本州唯一の産地となった（佐藤, 2004）。この地点以外では確認できず、現在に至っている。

[分布と生態の概要] 日本特産の種類で、北海道では礼文島・利尻島・夕張岳・幌尻岳・余市山地・太平山・奥尻島で分布確認がされている。北海道以外の分布は深浦町だけである。北海道では沿岸から高山の岩礫地に生育し、県内では深山溪谷の断崖礫地にわずかに見られる。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地点の断崖が崩壊すると一瞬にして消滅してしまう。また、入山などにより踏まれると急激に減少する。断崖崩壊の要因をつくらないこと、現地へ入山しないことが必要。

[特記事項] 発見時の標本は津軽植物の会の植物標本庫に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 キンポウゲ科

A

和名 オキナグサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Pulsatilla cernua* (Thunb. ex Murray) C. K. Spreng.

【形態的特徴】 草丈10cmほどの多年草。全体に長い白毛を密生している。葉は深く裂け、根生葉には柄が有る。根は太く真っすぐに伸びる。花は暗赤紫色で、包葉の中心から抜き出た花柄の先に一個つける。花後、白い毛をつけた果実が毛槍を思わせる。

【選定理由】 ここ数十年間に、急激に姿が見られなくなった植物である。現在では野生株を探す事が困難な状況となっている。津軽地区・下北地区の原野で少数株が確認されている。

【分布と生態の概要】 世界的に見た分布は、日本・朝鮮・中国の暖帯から温帯である。日本では九州から本州に生育している。日当たりの良い原野が生育場所であるため、原野の消滅とともに個体数が激減している。

【生存に対する脅威と保存対策】 生育場所の原野が開発や放置により無くなり、これに伴ってオキナグサも姿を消している。県内各地に草原を確保して生存を保障したい。草原確保により、共存するアズマギクやムシャリンドウやセンブリ等の増加も見られる筈だ。

【特記事項】 青森県が北限の植物。万葉集に詠われている「根都古具佐（ねつくぐさ）」は本種である。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 キンポウゲ科

A

和名 シコタンキンポウゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ranunculus grandis* Honda var. *austrukurilensis* (Tatew.) H. Hara

【形態的特徴】 海岸の草地に生える多年草。地下に走出枝を出す。茎は高さ30~60cm。茎や葉柄の毛はねていて少ない。染色体数は $2n=28$ の4倍体である。花期6月。よく似たウマノアシガタ（キンポウゲ）は地下に走出枝を出さず、 $2n=14$ である。

【選定理由】 本州唯一の産地であり、環境変化のいかんによっては生存の危険が考えられる。現在シコタンキンポウゲの生育する草地は寒立馬などの放牧地となっているが、幸いウマノアシガタ・シコタンキンポウゲを食草としないので、むしろ生育状態は良好である。しかし、今後馬の減少に伴って自然の牧野が放置されたり、牧草地化されることになればシコタンキンポウゲは急激に減少すると考えられる。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では東通村尻屋崎の海岸草地に産し、南限である。桑畑山産アイヌキンポウゲ（菊地, 1961）も同種と考えられる。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 キンポウゲ科

A

和名 チトセバイカモ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Ranunculus yesoensis* Nakai

【形態的特徴】 河川や湖沼に生える沈水植物。バイカモに似て花は幾分小型であるが、花床・瘦果・托葉が初めから無毛である。

【選定理由】 産地が限られており、水質悪化・開発等により減少している。

【分布と生態の概要】 北海道・本州北部に分布する。県内では小川原湖と奥入瀬川流域に確認されているが、角野（1994）は津軽半島・深浦町（十二湖・麩木）を記録している。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ポタン科

A

和名 ベニバナヤマシャクヤク

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Paeonia obovata* Maxim.

【形態的特徴】 林下に生える多年草。形態はヤマシャクヤクに似ており、茎は高さ30～50cm。葉は裏面に軟毛がある（毛のないものをケナシベニバナヤマシャクヤクという）。花は淡紅色、雌しべの柱頭は長く、外に巻くように曲がる（ヤマシャクヤクの柱頭は短く少し曲がる）。花期5～6月。

【選定理由】 ヤマシャクヤクより個体数はずっと少ない。落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化および園芸採取などにより著しく減少している。生育地の保存と採取の防止が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・サハリンに分布する。落葉広葉樹林内に生え、石灰岩を好む傾向がある。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 ケシ科

A

和名 オサバグサ

環境省：該当なし

学名 *Pteridophyllum racemosum* Siebold et Zucc.

【形態的特徴】 草丈20～40cmの多年草。葉は根出し、櫛状でシダ植物のシシガシラの葉に似ている。花は白色4弁で花茎の先に、総状につく。

【選定理由】 全国的に見ても希産種である。青森県では下北半島と津軽半島だけでより確認されていない。しかも、生育地は極限されていて、環境変化や採取などにより、消滅が心配される。

【分布と生態の概要】 本州中部と北部の亜高山帯針葉樹林内に生育している。青森県ではヒバを伴う落葉樹林内に生育し（木村, 1974）、個体数は年々減少している。原因の一つは採取によるものである。

【生存に対する脅威と保存対策】 希産種であり、鑑賞価値が高い種類なので、掘り取りが心配される。津軽半島のものは絶滅に向かっている。生育地域一帯を保存地域等に指定し、環境の変化と人の行為に対応する必要がある。

【特記事項】 青森県が北限の植物。一属一種の日本固有種。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 ケシ科

A

和名 エゾキケマン

環境省：該当なし

学名 *Corydalis speciosa* Maxim.

【形態的特徴】 ミヤマキケマンと外見はよく似ており、区別しにくい。種子の表面はミヤマキケマンでは小さい円錐状に尖って隆起しているが、本種は全く尖らず小疣状の突起を有する（凹点とみるのは誤り）。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手）、シベリア東部・サハリン・中国・朝鮮に分布する。県内では東通村尻屋の海岸部に小群がある。生態はミヤマキケマンと変わらない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ベンケイソウ科

A

和名 チチッパベンケイソウ

環境省：該当なし

学名 *Hylotelephium sordidum* (Maxim.) H. Ohba

[形態的特徴] 山地の岩上まれに樹上に生える。葉は対生または互生する。花茎は長さ10～25cmあり、花期は9～10月。

[選定理由] 北限種で産地は少ない。

[分布と生態の概要] 本州（中部以北）に分布する。県内では十和田湖畔の岩上や十二湖崩山に産する。一般に明るい岩上に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要。

[特記事項] チチッパは上州の方言で葉の汚れた感じのくすんだ色からきている。しかし、県内産は淡い緑色でくすんではない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ベンケイソウ科

A

和名 レブニワレンゲ

環境省：該当なし

学名 *Orostachys iwarenge* (Makino) H. Hara var. *furusei* (Ohwi) Ohwi

[形態的特徴] 岩上に生える多肉質の多年草。全体粉白を帯びた緑色。葯は黄色。よく似たコイワレンゲは帯粉せず緑色で、葯は赤紫色である。

[選定理由] 北海道の海岸にやや広く分布しているが、本州では八戸市の海岸以外に見られず、減少傾向にある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）に分布する。県内では八戸市の海岸の岩上や岩隙に生える。しばしばコイワレンゲと混生することもある。

[生存に対する脅威と保存対策] マニアの乱獲を防止する必要がある。

[特記事項] 本種の研究の歴史は八戸海岸の材料が最初であった。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ベンケイソウ科

A

和名 アズマツメクサ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Tillaea aquatica* L.

[形態的特徴] ナデシコ科のツメクサに似た草姿をしている。草丈5cmほどの小型1年草で、茎葉は肉質。茎は単一あるいは分枝し、薄緑色をしているが紅を帯びることもある。葉は無柄で対生し、線状で先が尖る。対生する2枚の葉の基部が連結している。花は小形白色4弁で左右の葉腋に交互して1個ずつ着く。

[選定理由] 日本では東京で最初に見出された種類で、北海道と本州の海浜泥地などにまれに生育している。県内では1975年6月に六ヶ所村尾駿沼で発見された（木村, 1975, 1976）。その後、同所では開発による環境変化で、姿を見せなくなった。しかし、2007年8月に東通村で発見され、唯一の生育地点となっている（木村, 2007）。

[分布と生態の概要] 世界的分布はヨーロッパ・北アフリカ・アジア・北アメリカの北半球である。東通村の生育地点では泥砂地に小群をつくっているが、数は極めて少ない。

[生存に対する脅威と保存対策] 自然保護区域などに指定して保存することが必要である。

[特記事項] 東通村の標本は、津軽植物の会植物標本庫に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 パラ科

A

和名 エゾノウワミズザクラ

環境省：該当なし

学名 *Prunus padus* L.

[形態的特徴] ウワミズザクラとよく似ているが、花が大きく疎らに着くので、一見して違いが分かる。樹皮は黒く、葉は倒卵形、葉の側脈は目立って多い。蜜腺は葉柄の上方にある。雄しべは花弁より短い。

[選定理由] 北海道のみでの分布であったが、1977年5月につがる市（旧木造町）の岩木川河畔で発見された（木村, 1977）。その後の調査で、岩木川を中心とした河川敷の複数地点で確認されたが、生育している株は少ない（奈良岡, 2002；木村, 2002）。

[分布と生態の概要] 世界的な分布はアジアの北東部からヨーロッパの温帯北部。日本では北海道と青森県のみ（木村, 1978）。県内では岩木川河川敷にハルニレ・ヤチダモ・ニワトコなどと一緒に生育している。樹高2mほどで地際から多数枝分かれしている。

[生存に対する脅威と保存対策] 岩木川が氾濫すると流される心配がある。また、河川敷内の畑に隣接しているので開墾のため伐採されることも危惧される。保存木指定し、周辺の環境と一緒に護ることが必要。

[特記事項] 青森県が南限の植物。発見時の標本は、東京大学植物標本庫に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 パラ科

A

和名 ミヤマダイコンソウ

環境省：該当なし

学名 *Geum calthifolium* Smith var. *nipponicum* (F. Bolle) Ohwi

[形態的特徴] 亜高山帯から高山帯の岩場に生える多年草。高さ10～30cm。茎や葉柄に黄褐色の剛毛がある。根生葉の頂小葉は円形で大きく、側小葉はごく小さい。花は黄色で、径2～2.5cm。花柱はまっすぐ（他のダイコンソウ類のようにかぎ状に曲がらない）、長さ10mm内外。花期は6～7月。

[選定理由] 県内の生育地は1か所だけで、個体数も少ない。高山生の植物であるのに高度の低い所にみられるのは特殊で貴重である。生育環境の保全と採取の防止が必要である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）・四国（愛媛）、千島に分布する。県内では佐井村縫道石山（626m）に産する。風衝地の岩隙や岩礫地に生息する。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 パラ科

A

和名 ホザキシモツケ

環境省：該当なし

学名 *Spiraea salicifolia* L.

[形態的特徴] 湿地周辺に生える落葉低木。高さ1～2m。茎にやや稜がある。葉は互生し、長さ6～10cm、狭長楕円形、鋭鋸歯がある。花は淡紅色、枝先に円錐花序につき、花弁は長さ2～3mm。花期は6～8月。

[選定理由] 本州では産地の限られた種である。県内の生育地は1か所だけで、付近では開発が進行している。開発はともすれば湿地優先となりやすいので、保存を計る必要がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・栃木・長野）、北半球北部に分布する。県内では階上町に産する。八戸ー久慈道建設に伴う調査（2001年）で小群が確認された。生育地はかつての牧野の凹地に残された沼沢地状の場所である。日当たりのよい湿地周辺に生え、地下茎を伸ばして繁殖する。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 バラ科

A

和名 ホロムイイチゴ

環境省：該当なし

学名 *Rubus chamaemorus* L.

[形態的特徴] 草丈10～20cmでトゲの無い雌雄異株の多年草。花は白色5弁、径2cmほど。果実は黄赤色に熟し卵状楕円形で長さ2cmほど。

[選定理由] 泥炭湿地という特殊環境に生育し、県内では2地点で確認されているが、数は極めて少ない。泥炭湿地が急激に減少しているため、絶滅が心配される。

[分布と生態の概要] 北海道・本州北部、千島・サハリン・北朝鮮北部から北半球の寒冷地方に分布する。県内では、1973年6月に五所川原市長富地区で発見された（木村, 1973, 1975）。近年小川原湖地区でも確認された。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育範囲が極めて狭く、周囲の環境が変われば急激に絶滅へと進むので、泥炭湿地環境の全体を保護する必要がある。

[特記事項] 五所川原市の天然記念物指定を受けている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 バラ科

A

和名 エゾシモツケ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Spiraea media* Schmidt var. *sericea* (Turcz.) Maxim.

[形態的特徴] 山地の岩石地に生える落葉低木。高さ1m内外。若枝は赤褐色で軟毛がある。葉は長さ2～3cm、長楕円形、鈍頭、先にだけ少数の鋸歯がある。枝先に散房花序をつけ、花は白色、径5～6mm。花期5月中～下旬。他のシモツケ類とは葉の形で見分けられる。

[選定理由] 産地に限られ個体数も少ない。生育地は崩壊斜面で、自然災害の危険性があり、また、高木類の進出による環境変化で消滅する恐れもある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、アジア東北部に分布する。県内では東通村尻屋に産する。石灰岩地の日当たりの崩壊斜面に、他の低木類と一緒に小面積で生育する。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 カエデ科

A

和名 クロビイタヤ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Acea miyabei* Maxim.

[形態的特徴] 山地に生える落葉高木。高さ15～20m。樹皮は灰黒色、縦に不規則に裂ける。葉は掌状に5中裂し、裂片に鈍歯牙があり、先は尾状に伸び鈍端（他のイタヤカエデ類は鋭先端）。花は淡黄色。花期5月。翼果は水平に開く。

[選定理由] 産地・個体数が少ない。生育適地の谷沿いの開田・植林が進んで産地が著しく減少した。今は溪流のほとりにわずかに残るだけである。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・秋田・長野）に分布し、日本固有。県内では八戸市南郷と平川市碓ヶ関に産する。本州北部では北上山地が分布の中心で、八戸市南郷ではその北端部に相当する。岩手県北部ではしばしば小群が見られる。谷川沿いに生育することが多い。エゾイタヤなどと同等に扱われ伐採されるおそれがあるので、貴重種であることを啓発する必要がある。

(根市益三)

双子葉植物離弁花類 スミレ科

A

和名 キバナノコマノツメ

環境省：該当なし

学名 *Viola biflora* L.

[形態的特徴] 葉の下面の脈上、上面および縁辺に毛を散生する。茎は斜上し、長さ5～12cm、まばらに3～4葉をつける。葉は軟弱であって波状歯がつき、基部は心形をなし、円頭で、長さ1～2cm、幅1.5～3.5cm、柄は長さ葉の2～6倍で2～10cm。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）・四国・九州（屋久島）に分布する。県内では南八甲田乗鞍岳・横岳に産する。高山の湿った草地や砂礫地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地の保存と採集の防止が必要。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 スミレ科

A

和名 エイザンスミレ

環境省：該当なし

学名 *Viola eizanensis* (Makino) Makino

[形態的特徴] 山地の木陰に見られる。地上茎はなく、葉も花も多数そう生する。葉は3全裂し、各裂片に柄がある。花は大きく淡紅紫色から桃白色で側弁有毛。

[選定理由] 太平洋側の低山地が生育域であるが、一地域だけの生育であり、個体数も極めて少ない。生育場所が道端なので、道路拡張や整備工事などで一瞬に消滅することも心配される。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本だけ。日本の分布は本州の青森県から九州霧島まで。県内での分布は五戸町手倉橋・階上町赤保内に限られる。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地点が極限され、しかも開発可能地域となっているので、一瞬にしての絶滅が危惧される。保護地指定が必要である。

[特記事項] 青森県北限植物。

(木村啓)

双子葉植物合弁花類 イチヤクソウ科

A

和名 カラフトイチヤクソウ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Pyrola faurieana* H. Andres

[形態的特徴] 高山帯に生じ、高さ10～20cm。葉は卵形で厚い。比較的小形の平開しない花を多数着け、花柱がやや短く湾曲しない。

[選定理由] 県内ではきわめてまれな植物である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（東北地方）、南千島・サハリンに分布する。県内では八甲田大岳、赤倉岳ほかに産する。亜高山帯から高山帯の草地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取を防止する必要がある。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 ツツジ科

A

和名 バイカツツジ

環境省：該当なし

学名 *Rhododendron semibarbatum* Maxim.

[形態的特徴] 落葉低木で、小形な梅花咲きの白色の花は他に似たものがない。花が咲いてなければ気づかれないことが多い。

[選定理由] 県内ではきわめてまれである。

[分布と生態の概要] 北海道（南部）・本州・四国・九州に分布する。県内では深浦町（旧岩崎村）の山地に産するが、詳しいことは分かっていない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 ウリ科

A

和名 スズメウリ

環境省：該当なし

学名 *Melothria japonica* (Thunb. ex Murray) Makino

[形態的特徴] 蔓性の1年草。茎は細長く、巻き鬚で他物にからみ延長する。葉は卵円形で頭が鋭く尖り、正面がざらつき薄い。花冠は白色で5裂し、径5mmほど。果実は径1～2cmの球形で、糸状の柄に下垂している。

[選定理由] 九州・四国・本州に分布するが、青森県での記録がなかった。1966年9月4日に深浦町吾妻川で発見された。この発見を契機に、各地で確認調査がなされているが、深浦町以外では見出せずにいる。深浦町では複数地点で確認されたが、個体数は少ない。

[分布と生態の概要] 世界的分布は、日本と济州島である。原野や水辺に生育しているが、深浦町では自然状態の川辺にまれに見られるのみである。1年草であるため生育地点の環境変化により、発芽せずにいることがあるようで、植物体が見られない年もある。

[生存に対する脅威と保存対策] 河川改修等がなされると、一瞬にして姿を消してしまう種類であるようなので、生育地点の自然環境をこのままに維持してもらいたい。

[特記事項] 発見時の標本は、東京大学植物標本庫に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 スギナモ科

A

和名 スギナモ

環境省：該当なし

学名 *Hippuris vulgaris* L.

[形態的特徴] 湖沼や池塘などに生育する沈水～抽水植物。流水中では流れになびき、止水中では茎上部が気中に立つ。葉が多数輪生し、スギナの形状を思わせる。花は葉腋に着き濃紅紫色で、果実は楕円形で2mmほど。

[選定理由] 全国的に分布が限られており、県内では八甲田田代地区の1地点だけで確認されているのみ。環境変化により絶滅が心配される。

[分布と生態の概要] 世界的には周北極地域に分布する。日本では北海道と本州中部以北に見られる。県内では、湧水環境の清流中に姿を見せている。

[生存に対する脅威と保存対策] 湧水という特殊環境なので、環境が変われば直ちに絶滅へと進む。環境保全が必要である。

[特記事項] 標本は、国立科学博物館に納められている。

(木村啓)

双子葉植物離弁花類 アマ科

A

和名 マツバニンジン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Linum stelleroides* Planch.

[形態的特徴] 日当たりのよい草地に生える1年草。高さ40～60cm。葉は狭長楕円形で幅2～4mm、3脈がある。花は淡紫色で径約1cm。花弁は5枚。

[選定理由] 1960年代から激減し産地の消息が不明となっている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。県内では、かつて全域の草地に分布していたが、戦後牧野がなくなるに従って影を潜めるようになった。最近三沢市の米軍基地内で見つかった。今は代わって形態がよく似て花が黄色の外來種キバナノマツバニンジンが進出してきている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 アカバナ科

A

和名 ケゴンアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium amurense* Hausskn.

[形態的特徴] イワアカバナに似ているが、高さは低く6～40cm。茎は2列の綾線上に伏毛がある点で区別される。

[選定理由] 最近報告もなく消息不明となっている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国、アジア東北部に分布する。県内では八甲田大岳の石礫地で原寛によって確認されたが、その後見つかっていない。

[特記事項] アカバナ類は分類が難しいので、引用標本がない過去の記録は再確認が難しい。最近「新牧野日本植物図鑑」(大橋ら, 2008)では県内に広く分布しているイワアカバナは本種の亜種 *E. amurense* subsp. *cephalostigma* (Hausskn.) Chen *et al.*として取扱われている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 アカバナ科

A

和名 アシボソアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium dielsii* H. Lév.

[形態的特徴] 高山の礫地や草地に生える小さな多年草。茎は高さ3～15cm。葉は卵状長楕円形、花は淡紅色。柱頭はこん棒状。花期は7～8月。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州(中部以北)、周北極地に分布する。県内では八甲田大岳噴火口のあたりに見られる。

(細井幸兵衛)

双子葉植物離弁花類 アカバナ科

A

和名 ヒメアカバナ

環境省：該当なし

学名 *Epilobium fauriei* H. Lév.

【形態的特徴】 亜高山帯の砂礫地や岩場に生える小型の多年草。茎は高さ3～20cm。葉は線形。柱頭はこん棒状。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北、鳥取大山が南限）、千島に分布する。県内では岩木山に産し、山頂の岩石地に見られる。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 リンドウ科

A

和名 ムラサキセンブリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Swertia pseudochinensis* H. Hara

【形態的特徴】 草地に生える1年草または越年草。茎は高さ10～50cm、暗紫色を帯びる。葉は対生し長さ2～4cm、線上披針形。花は青紫色で、濃紫色の脈がある。花冠裂片の密腺溝の毛に乳頭突起がある（類似種センブリの毛は平滑）。花期9月下旬～10月。

【選定理由】 生育環境が狭められ著しく減少している。「青森県レッドデータブック」（2000年）で絶滅EXとされたが、2000年10月に八戸市のアカマツ林伐採造成地に発見され、同普及版（2001年）ではカテゴリーEXからAに変更された。その後八戸－久慈道建設調査（2001年）で、最近では2007年に東通村野牛の新設道路脇で三上により発見されている。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・アムールに分布する。県内では太平洋側に希産する。かつては牧野のススキ草地などに生育していたが、1960年代から消息不明となっていた。最近、以前の生育地であった辺りの攪乱地にまれに出現することが分かった（青森県, 2007）。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 ツツジ科

A

和名 キバナシャクナゲ

環境省：該当なし

学名 *Rhododendron aureum* Georgi

【形態的特徴】 高山に生える常緑低木。茎は普通横に這い、枝は斜上して高さ20～100cm。葉は枝の先に集まり、柄があり基部は楔形。花は黄色、枝の先に集まってつき、径3cm前後。花期は7月頃。県内に広く分布するハクサンシャクナゲは、葉の基部が円いか浅く心形になることで区別される。

【選定理由】 本県ではきわめて珍しい植物で、盗掘のため自生地ではほとんど確認できなくなっている。マニアの採取を防止する必要がある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン以北の寒帯に分布する。高山のハイマツ林や礫地に生える。県内では、かつて、白神山地・八甲田山・岩木山などで生育が確認されているが、その後の報告がきわめて少ない。花期には花の色で分かるが、花のない時期は葉の形態で判断するしかない。

(齋藤信夫)

双子葉植物合弁花類 ツツジ科

A

和名 チシマツガザクラ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Bryanthus gmelinii* D. Don

[形態的特徴] 高山帯の岩石地に生える常緑の小低木。概形がガンコウラン（ガンコウラン科）に似ている。花冠は離弁性で径5～7mm。花弁は4個、淡紅色。

[選定理由] 希産種である。盗掘により激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手）、千島・カムチャッカに分布する。県内では南八甲田山に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 盗掘の防止と生育地の保存が必要である。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 ツツジ科

A

和名 エゾノツガザクラ

環境省：該当なし

学名 *Phyllodoce caerulea* (L.) Babing.

[形態的特徴] 高山に生える常緑の小低木。よく分枝し、形態はアオノツガザクラに似ているが、花冠は紅紫色。蒴果に残る花柱は果体より長い。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・山形）、北半球北部に分布する。県内では岩木山だけに産する。雪田の周辺の草地や礫地に生える。

[生存に対する脅威と保存対策] 乱獲を防止する必要がある。

[特記事項] 岩木山のものは典型的なエゾノツガザクラと異なり、一集団があるのみである。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 サクラソウ科

A

和名 サクラソウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Primula sieboldii* E. Morren

[形態的特徴] 湿り気の多い所に生える多年草。全体にちぢれた毛がある。葉は長さ4～10cm。長卵形から楕円形、しわが多い。花茎は15～40cm。花は先端に7～10個散形につき紅紫色、径2～3cm。花期5月。栽培され多くの園芸品種がある。

[選定理由] 草地の減少、遷移の進行、落葉広葉樹林の伐採および外来種との競合などにより著しく減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・九州、朝鮮・中国（東北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では太平洋側に偏った分布を示す。かつては海岸草原から内陸部の牧野・採草地の湿地周辺に広く分布していたものと考えられる。今は七戸町・三沢市以南にややまれに産するだけである。日当たりの湿地周辺に生えるが、川岸の春日光のよく差し込む落葉広葉樹林内にも見られる。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 ハナシノブ科

A

和名 エゾノハナシノブ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Polemonium caeruleum* L. subsp. *yezoense* (Miyabe et Kudo) H. Hara

[形態的特徴] 亜高山帯の岩場や草地に生える多年草。茎は高さ30～80cm。葉は羽状に全裂し、小葉は8～12対ある。花冠は青紫色で5裂し、径3cmぐらい。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）に分布する。県内では白神山地の一部に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 ガガイモ科

A

和名 コカモメヅル

環境省：該当なし

学名 *Tylophora floribunda* Miq.

[形態的特徴] 山野に生えるつる性の多年草。葉は対生し、卵状披針形、基部心形、長さ3～6cm、幅1～3cm。花は暗紫色。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では原田幸雄が南部町（旧名川町）で採取した標本（Aug. 11, 1975）が1点あるだけで、以来同方面で再確認されていない。北限種である。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キョウチクトウ科

A

和名 バシクルモン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Trachomitum venetum* (L.) Woodson var. *basikurumon* (H. Hara) H. Hara

[形態的特徴] 海岸に生え、茎は高さ40～80cmで帯赤色。葉は小判型で、長さ2～5cm、対生する。花冠は鐘形で淡紅色、長さ6～7mm。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道（西南部）・本州（青森から新潟までの日本海側）、南欧・ロシア・モンゴル・中国東北部・朝鮮に分布する。県内では夏泊半島だけに産する。

[特記事項] 宮部（1949）はアイヌ語で「Paskuru-mun」（長い地下茎を出す草）からきており、これは驚くべき長い地下茎を以てはびこる草の意であるとしている。産地に因みオショロソウ（忍路草）ともいう。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キキョウ科

A

和名 バアソブ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Codonopsis ussuriensis* (Rupr. et Maxim.) Hemsl.

【形態的特徴】 林縁などに生えるつる性の多年草。ツルニンジン（ジイソブ）に似ているが全体小型で、葉裏に毛が多い。花冠は鐘形で長さ2～2.5cm（ツルニジンは2.5～3.5cm）。花期8～9月。種子は黒褐色で翼がない（ツルニジンは淡褐色で翼がある）。

【選定理由】 産地・個体数がきわめて少ない。もともとまれな種であったが、森林伐採・開発等により最近見掛けなくなっている。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、中国（東北部）・ウスリー・アムールに分布する。県内ではごくまれで、分布状況は明確でない。ツルニンジンによく似ているので見過ごされていることもある。林縁や林内に生息するが、落葉広葉樹林の伐採跡に出現することもあるので注意したい。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 キキョウ科

A

和名 モイワシャジン

環境省：該当なし

学名 *Adenophora pereskiefolia* (Fisch.) Fisch. var. *moiwana* (Nakai) H. Hara.

【形態的特徴】 山地の岩場に生える多年草。茎は高さ30～60cm。根生葉は卵心形で長柄がある。茎葉は互生から輪生、長さ2～8cm、披針形から卵形。花は総状花序につき、花冠は鐘形、青紫色から白色、花盤は高さよりも幅が広いが同長。花期7～9月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。減少傾向にあり、採取の防止等が必要である。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手・宮城）に分布する。日本固有。県内では北半島と白神山地に産する。山地から高山の岩場に生育し変異が多い。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 ムラサキ科

A

和名 ムラサキ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zucc.

【形態的特徴】 山地の草原に生える多年草。全体に粗毛が多い。茎は高さ40～70cm。葉は披針形、表面にへこんだ平行脈が目立つ。花は白色で径4mm、喉部に黄味を帯びた突起がある。花期7月。分果は白色で平滑。

【選定理由】 生育地である草地の減少・植生遷移・外来種との競合などにより、産地・個体数の減少が著しい。

【分布と生態の概要】 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では全域に分布するがまれである。かつては草地にまれでなかったが、牧野・採草地の廃止と共に1960年代頃から激減した。日当たりの排水のよい土壌を好むので、石灰岩地が適合し、今でも東通村尻屋および八戸市・階上町の石灰岩地で見られる。

【特記事項】 根は昔から紫根染めに用いられ、かつては各地で栽培が行われ、南部地方のものは特に「南部紫」として有名であった。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 ムラサキ科

A

和名 ツルカメバソウ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Trigonotis icumae* (Maxim.) Makino

[形態的特徴] 林下の湿り気のある所に生える多年草。茎は高さ10～20cm。花が終る頃葉腋から走出枝を長く伸ばし新苗を生じる。葉は卵形、下部のものには長柄がある。花は淡青色から白色、直径1cmぐらい。花期5月下旬～6月。類似種タチカメバソウは山地生で走出枝を出さない。

[選定理由] 生育地はむしろ里山の範囲にあり、これまで開田や環境改変で失われてきたものと考えられ、開発等により減少している。

[分布と生態の概要] 本州（中部以北）に分布する。日本固有。県内では太平洋側南部の八戸市・階上町に産し、北限である。丘陵地の沢沿いの林下や流れのほとりに小群で点在する。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 カイジンドウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Ajuga ciliata* Bunge var. *villosior* A. Gray

[形態的特徴] 林縁や明るい林内に生える多年草。全体に白い毛がある。茎は直立して高さ30～40cm、下部は帯紫色。葉は狭卵形で、しばしば帯赤紫色、あらい鈍鋸歯がある。花は紫色で上部に集まってつく。花冠の上唇は2裂してごく短い。花期6～7月。

[選定理由] もともと個体数の少ない種であったが、生育地である落葉広葉樹林の減少、開発および外来種との競合などにより産地・個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・九州に分布する。日本固有。県内では太平洋側に希産する。やや乾いた落葉広葉樹林内や林縁に生育する。個体数が少なく目立たない植物であるが、落葉広葉樹林の伐採跡地に出現することもあるので注意したい。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 ルリハッカ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Amethystea caerulea* L.

[形態的特徴] 長い葉柄と三深裂の被針形尖頭の小葉があり、小さいルリ色の花が多数着く。こういう特徴あるシソ科の植物は他に見られない。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・トルコに分布する。県内では八戸市南郷区に産することが1999年に確認されたが、その後ダム建設（青葉湖）により生育地は水没した。乾いた裸地状の環境に最大90cmの小群を含めて数か所に生育していた。全国的にも産地がまれな種類で、岩手県に割合産地が多く、南郷区も隣接しているので再確認を期待する。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 ムシャリンドウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Dracocephalum argunense* Fisch.

[形態的特徴] 草丈15～40cmの直立した多年草。茎は四角形で葉は対生している。葉は細長く2～5cm、幅2～5mm、質はやや厚く表面は光っている。花は茎の頂に数個つけ、青紫色で唇形をしている。一見、リンドウ科のリンドウの花を思わせる。

[選定理由] 30年ほど前までは県内各地に見られたが、近年はごく少なくなった。現在、確認されている自生地は深浦町など数か所である。生育場所である原野が無くなっているため、絶滅が心配される。

[分布と生態の概要] 世界的分布は、日本・朝鮮・中国東北部・東シベリアである。日本では北海道から本州中部まで分布している。本種の生育場所は、日当たりの良い原野なので、原野が消滅するのに伴って姿を消している。

[生存に対する脅威と保存対策] 原野が少なくなって、本種も減少の一途をたどっている。原野を復活させることが最上の保護対策である。

[特記事項] 現在、深浦町ではムシャリンドウ自生地を護るため、火入れや刈払い等の原野復活の試みがなされている。

(木村啓)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 エゾナミキソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Scutellaria yezoensis* Kudo

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ30～60cm、4稜があり、稜上にちぢれ毛がある。葉は長卵形～長楕円状披針形、先はややとがる。花は淡青紫色。花期7～8月。類似種ナミキソウは海岸の砂地や草地に生え、全体やや小さく、葉は長楕円形で先は丸い。

[選定理由] 六ヶ所・東通原子力関連開発等で生育地の湿原が次第に失われている。残された所も開発や植生遷移等により生存の危険が増大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・長野・岐阜）、朝鮮・千島・サハリンに分布する。県内では海岸部の湿原から湖沼周辺・河岸等の湿地に見られる。太平洋側に産地が多い。陽性の湿地に生えるがハンノキ林内にも生育する。溜池周辺や水路脇に見出されることもあり、これまで開田により失われた所も多いと考えられる。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 イヌニガクサ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Teucrium veronicoides* Maxim. var. *brachytrichum* Ohwi

[形態的特徴] 母種のエゾニガクサに似ているが、開出毛が短くて少なく、葉の鋸歯が粗大である。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（東北地方）に分布する。県内では青森市合子沢（木村悦子 July 26, 1998）・八戸市尻内町張田（細井幸兵衛 July 28, 2000）で採集されている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 シソ科

A

和名 ヒメハッカ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mentha japonica* (Miq.) Makino

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。全体が小形でハッカよりも葉が小さく2 cm以下、全縁で毛が少ない。花序は短い。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）の主に太平洋側に分布し、県内では東通村の湿地で確認したがその後の記録はない。東通村にあった小群生地は道路整備で失われた。

[生存に対する脅威と保存対策] 湿地の開発に際しては注意し、発見した時は移植する。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 ゴマノハグサ科

A

和名 マルバノサウトウガラシ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Deinostema adenocaulum* (Maxim.) Yamazaki

[形態的特徴] 湿地に生える1年草。サウトウガラシによく似ているが、葉は卵円形で5～7本の目立つ脈がある。花冠も小さく、長さ4 mm。

[選定理由] 湿地の埋立て、耕地整理、除草剤散布で激減している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、朝鮮南部に分布する。県内では鶴田町の休耕田とつがる市平滝沼に産するが、他にも精査を要する。

[生存に対する脅威と保存対策] 花が小さく目立たないので、採取の心配はないが、保護して行くべきである。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 ゴマノハグサ科

A

和名 ヒナノウスツボ

環境省：該当なし

学名 *Scrophularia duplicatoserrata* (Miq.) Makino

[形態的特徴] 山地の谷間に生える多年草。茎の高さは40～100cm、4稜がある。葉は膜質で柔らかい、鋸歯は粗くやや重鋸歯。円錐花序は花柄がやや長く、まばらに多くの花をつける。花冠は暗赤紫色。雌しべ先熟。花期6～8月。

[選定理由] 希産種で個体数は少ない。生育地の新井田川流域は北上山地の北端部に相当し、たかの巣溪流と呼ばれる景勝地であったが、1950年代に溪流沿いに道路が開通してからは採石場が林立するようになり、道路工事で生育地が失われた所もあり、採石場の拡張で消滅の恐れがある。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市の新井田川流域に希産する。北限である。溪流沿いの林縁のやや湿った場所に生育する。付近には北限種のハナビゼリもみられる。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 ゴマノハグサ科

A

和名 クワガタソウ

環境省：該当なし

学名 *Veronica miqueliana* Nakai

[形態的特徴] 林下に生える多年草。高さ10～20cm。茎に曲がった毛がある。葉は卵型で長さ1～5cm、幅0.7～2.5cm。花は淡紅紫色で、径8～13mm。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（太平洋側）に分布する。県内では八戸市南郷区の市民の森に産する。この花は純白であった。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取を防止する。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 タヌキモ科

A

和名 ヤチコタヌキモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Utricularia ochroleuca* R. Hartm.

[形態的特徴] 浅い池沼などに生える食虫植物。黄色の花をつける。コタヌキモに似ているが水中葉に捕中囊がある。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州に分布する。県内では八甲田山の湿原に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 水深が浅くなって枯死することがないように、水深を保つようにする。

[特記事項] ヨーロッパに分布しているものと同じものか検討を要する。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 タヌキモ科

A

和名 ミミカキグサ

環境省：該当なし

学名 *Utricularia bifida* L.

[形態的特徴] 水位変化のある溜め池などの縁に見られる多年生の食虫植物。浅い地中に白色糸状の地下茎をのばし、捕虫袋をつける。花は黄色で、10cmほどに直立した花茎に数個つける。

[選定理由] 生育に適した溜め池が減少し、ごく一部の場所に生育が見られるのみである。

[分布と生態の概要] 世界的分布はアジア東部と南部、そしてオーストラリア。日本では北海道を除いて、本州から沖縄まで分布している。県内では一部の溜め池に生育しているのみである。

[生存に対する脅威と保存対策] 溜め池の改修工事などで環境変化が著しい。生育場所を的確に把握して、環境変化が起こらないように保存する必要がある。

[特記事項] 青森県北限種。

(木村啓)

双子葉植物合弁花類 タヌキモ科

A

和名 オオタヌキモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Utricularia macrorhiza* Le Conte

[形態的特徴] タヌキモに似ているが全体が大きい。花は下唇の両縁が垂れ、距が前上に曲がる。

[選定理由] 県内の分布状況はまだ十分明確でないが、水質悪化などにより減少が考えられる。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・秋田）、北半球の寒地に分布する。県内では小宮ら（2001）はつがる市（旧木造町）の9か所の標本を記録した。他に北海道9か所、秋田県1か所である。細井の標本には東北町向山の小川原湖（July 25, 1992 花あり）とつがる市（旧森田村）（Aug. 7, 1990 花なし）の2点が含まれている。

（細井幸兵衛）

双子葉植物合弁花類 スイカズラ科

A

和名 エゾヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera alpigena* L. subsp. *glehnii* (Fr. Schm.) H. Hara

[形態的特徴] 山地に生える落葉低木。高さ2～3m。若い枝は茶褐色で4稜がある。葉は長さ5～14cm、卵形から卵状長楕円形、先は鋭くとがる。葉腋から5～3cmの花柄を伸ばし、淡黄緑色または赤紫色を帯びた花を2個つける。花期5～6月。果実は液果で赤熟し、2個合着する。

[選定理由] 目立たないが分布の限られたきわめて珍しい植物である。風穴という特殊環境に生育し、周辺的环境変化に敏感であることから、生育地周辺の植生の保全が必要である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、南千島・サハリンに分布する。県内では黒石市黒森山に産し、白神岳にも報告がある。山地の岩塊の堆積した風穴周辺に生育する。

（齋藤信夫）

双子葉植物合弁花類 スイカズラ科

A

和名 ベニバナヒョウタンボク

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lonicera maximowiczii* (Rupr. ex Maxim.) Rupr. ex Maxim. var. *sachalinensis* Fr. Schm.

[形態的特徴] 亜高山帯に生える落葉低木。その名のように紅色の花を咲かせるヒョウタンボクの一様である。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、南千島・サハリンに分布する。県内では八甲田山群の一部に希産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要である。

[特記事項] 北海道では高さが2～3mになるが、本県では1m以下である。山形県西置賜郡高畠町小湯山（コヨウザン）で大高滋・山田實爾の両氏によって発見されたウゼンベニバナヒョウタンボク *L. uzenensis* Kadota との関係について検討を要する。

（細井幸兵衛）

双子葉植物合弁花類 スイカズラ科

A

和名 ケヨノミ

環境省：該当なし

学名 *Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis* (Turcz.) Hultén

[形態的特徴] 亜高山帯に生える落葉低木。高さ1m内外。毛が多いものから少ないものまで変異があり、毛のきわめてすくないものをクロミノウゲイスカグラとして区別することもある。葉は長さ2.5～6cm、楕円形で鈍頭。花は葉腋に2個ずつ下向きにつき、黄白色。花冠は5裂し、長さ11～13mm。花期は5～6月。果実は液果で黒紫色に熟す。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。生育地が登山道近くで立入り等により植生が変わると消滅の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、北半球に分布する。県内では新郷村戸来岳に希産する。上部のミヤマヤナギ・マルバシモツケ・チシマザサなどの低木林中に生息する。

(根市益三)

双子葉植物合弁花類 マツムシソウ科

A

和名 マツムシソウ

環境省：該当なし

学名 *Scabiosa japonica* Miq.

[形態的特徴] 山地の草原に生える2年草。茎は高さ30～80cmで直立し分枝する。葉は対生し羽裂する。裂片の先は鈍頭。裂片の先が鋭くとがるものをエゾマツムシソウ（トウマツムシソウ）という。

[選定理由] 産地が少なく開発等により激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州に分布する。県内では三沢市に産する。その生育地は現在三沢米軍基地となっている。津軽半島竜飛崎の風衝地にはエゾマツムシソウが知られているが、これも減少傾向にある。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地をそのままにして手を加えない。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 ヒメヒゴタイ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Saussurea pulchella* (Fisch.) Fisch.

[形態的特徴] 草丈1mほどの多年草で、一見アザミを思わせる姿をしている。茎は直立し、上部に多数の頭花を密集させている。頭花は紅紫色で良く目立っている。総苞片の先端には、円く膜質紫色の付属物がある。

[選定理由] 日当たりの良い山地草原に生育している植物で、以前から県内での数は少なかった。それに加えて、山地草原が減少しているため、ほとんど姿が見られなくなっている。

[分布と生態の概要] 世界的分布は東アジアの温帯で、日本・朝鮮・サハリン・東シベリア・中国東北部などに見られる。日本での分布は北海道・本州・四国・九州で山地草原に生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 本種の生育場所である山地草原を残す工夫をする。

[特記事項] 現在、大鰐町の山地草原などにわずかに姿を見せている。

(木村啓)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 ヒメガンクビソウ

環境省：該当なし

学名 *Carpesium rosulatum* Miq.

[形態的特徴] 林内に生える多年草。茎は細く高さ15～45cm。根出葉は花時にも残り、さじ形で、不ぞろいの鋸歯がある。頭花は小さく5mmぐらい。

[選定理由] 希産種で個体数も少ない。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州に分布する。県内では日本海側の低山地に希産し、深浦町十二湖のヒバ広葉樹混交林下・小泊村のヒバ林下・今別町のスギ人工林下などに生育が確認されている。

[生存に対する脅威と保存対策] 開発等による減少の危険性がある。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 ムカシヨモギ

環境省：該当なし

学名 *Erigeron acer* L. var. *kamtschaticus* (DC.) Herder

[形態的特徴] 山地の岩石地に生える多年草。茎は高さ15～50cm。頭花は白色で径約1.5cm。総苞片に粉状の細毛がある（よく似たエゾムカシヨモギの総苞片には剛毛がある）。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、朝鮮・千島・サハリン・カムチャッカ・アラスカに分布する。県内では青森市東岳で豊田剛により採集されている。古くは村井（1939）の記録がある。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 エゾトウヒレン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Saussurea riederi* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam.

[形態的特徴] 海岸の草地に生える多年草。高さ30cm内外。ナガバキタアザミに似ているが、総苞片は尾状に伸びず鋭頭である。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）に分布する。県内では下北半島の大間町の海岸近くに1か所の産地がある。ここでは北海道産よりも小形であり、今のところ南限産地である。

[特記事項] 「Flora of Japan IIIb」(Iwatsuki *et al.*, 1994) ではカラフトアザミ *S. acuminata* Trucz. subsp. *sachalinensis* (F. Schmidt) Kitam. に当てられている。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 ナガバキタアザミ

環境省：該当なし

学名 *Saussurea riederii* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam.

【形態的特徴】 高さ15～40cmの多年草。葉は3角状卵形で質がやや厚く、茎の上部でも小さくならない。総苞片の先は尾状に伸びる。

【選定理由】 産地が限られ個体数は少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（青森・岩手）に分布する。県内では東通村尻屋に産する（細井, 1994）。生育地は石灰岩の崩壊斜面草地である（一般には亜高山帯から高山帯に生える）。

【生存に対する脅威と保存対策】 岩石の崩落など自然災害による危険性がある。

【特記事項】 本州では古くから早池峰山にのみ分布していることが知られていた。

(細井幸兵衛)

双子葉植物合弁花類 キク科

A

和名 アキノハハコグサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Gnaphalium hypoleucum* DC.

【形態的特徴】 山野のやや乾いた所に生える1年草。茎は高さ30～60cm、上部で分枝し、白い綿毛がある。葉は披針形、表面緑色で裏は白綿毛が密にある。花は散房状につき、頭花は黄色、外片は短い。花期9～10月。

【選定理由】 産地・個体数がきわめて少ない。環境変化により生育適地が失われてきている。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、朝鮮・中国・東南アジア・インドに分布する。県内ではまれに産するが、分布状況は明らかでない。八戸市で2004年に道路新設と既設道路の遊歩道化に伴って7km隔てて複数の場所で出現している。いずれも攪乱地の境界付近で、在来の植物が残っていてすぐには外来種1年草の進入しにくい場所である。先駆植物で2～3年で消息不明となることが多い。

(根市益三)

単子葉植物 ウキクサ科

A

和名 ヒンジモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lemna trisulca* L.

【形態的特徴】 池沼などに生える沈水性の浮遊植物。葉状体は卵状長楕円形で、長さ7～10mm、細長い柄で連なる。水面上に3個ずつ「品」字形を描いて連なる様子から和名がきている。

【選定理由】 希産種で水質悪化等により生育地が失われる恐れがある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州、南米以外の全大陸に分布する。県内ではフォーリーの採集した標本等で記録されていたが、その後消息不明となっていた。2000年に今らにより小川原湖・仏沼に生育していることが確認された。

【生存に対する脅威と保存対策】 仏沼の生育地は停滞水状で良好と思われないが、水質条件の研究が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ホロムイソウ科

A

和名 ホソバノシバナ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Triglochin palustre* L.

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。根茎は短く、走出枝を出す。葉は細かく幅約1mm。花期7～8月。果実は長さ9mm、線形で下部が細まり、直立する。同じ仲間のオオシバナは塩性湿地に生え、果実は長さ3～5mmで、長楕円形から卵形である。

[選定理由] 目立たないが産地の限られた種で、高山のものは保護状態にあるが、低地では湿原開発・護岸工事などで減少が進行している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（関東以北）、北半球に広く分布する。県内では八甲田山および太平洋側の海岸や湖沼周辺の湿原に点在する。高瀬川河口部などの塩性湿地にオオシバナと混生することもある。

(根市益三)

単子葉植物 ヒルムシロ科

A

和名 ツツイトモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potamogeton panormitanus* Biv.

[形態的特徴] 海水が流入する汽水中に生え、イトモに似ているが、花は離れて2段に着く。茎の葉の基部は合着して茎を包むので筒イトモと命名された。

[選定理由] 開発によって生育地が失われてきている。

[分布と生態の概要] 北半球に広く分布し、県内では十三湖・小川原湖・鷹架沼・尾駈沼に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 環境が悪化しないように見守りたい。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ヒルムシロ科

A

和名 カワツルモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ruppia maritima* L.

[形態的特徴] 海岸の潮だまり（タイドプール）や湖沼など淡水と海水の交じる所に生える多年草。細い地下茎と水中茎を伸ばす。葉は互生し、長さ5～10cm、葉鞘がある。花柄は2～10cm、2～3回巻くことがある。先に2個の花をつける。

[選定理由] 生育地が次第に失われており、残った所でも個体数が減少している。

[分布と生態の概要] 世界中に広く分布しているといわれるコスモポリタン種（広布種）であるが、各地で産地は失われつつある。県内では八戸市鮫町・小川原湖などに産する。階上町では開発により消滅した。

[生存に対する脅威と保存対策] タイドプールは海岸でも多くはない。今は生育環境を変えないよう監視したい。

[特記事項] 小川原湖には花が咲いても果実が熟さない群落もあり花梗が緩く巻く。ネジリカワツルモとの関係は不明である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ヒルムシロ科

A

和名 ササエビモ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Potamogeton nipponicus* Makino

[形態的特徴] 湖沼や河川に生える沈水植物。浮葉はない。沈水葉は倒披針形から長楕円形、長さ2.5～8 cm、幅5～15mm。よく似たエゾヒルムシロにはまばらに浮葉がある。

[選定理由] 産地が限られ水質悪化等により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・九州に分布する。県内では十和田湖、小川原湖に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 水質悪化の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 トチカガミ科

A

和名 トチカガミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

[形態的特徴] 湖沼・ため池や水路などに生える浮遊性の多年草。葉は円形で基部心形、直径4～7 cm。雌花と雄花がある。花弁は3個で白色、長さ1～1.5 cm。

[選定理由] 生育地が失われ個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、東南アジア・オーストラリアに分布する。県内では終戦後しばらく農業があまり使われていない頃は水田地帯には広く分布していたが、いまでは激減して見つけることが難しくなった。

[生存に対する脅威と保存対策] 農業や生活廃水等による水質悪化を防止する。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 イバラモ科

A

和名 イトトリゲモ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Najas japonica* Nakai

[形態的特徴] 貧栄養のため池や水田に生える沈水性の1年草。トリゲモ類のうちでもっとも葉が細く、5輪生し、長さ1～2 cm、幅約0.2mm。果実は常に2個並んで着く。

[選定理由] 生育地が失われ個体数が激減している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。県内では全域に産したが、今では自然度の高い池沼にしか残っていない。

[生存に対する脅威と保存対策] 農業や生活廃水等による水質悪化を防止する。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ユリ科

A

和名 ヒメユリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lilium concolor* Salisb.

[形態的特徴] 草地に生える多年草。茎は高さ30～80cm。葉は線形。花は朱赤色、小型で上向きに咲く。花期7月中旬。変異が多く、産地などで園芸上区別されることがあり、土地ではミチノクヒメユリ・ナンブヒメユリ・エゾアカヒメユリなどの呼び名がある。

[選定理由] 産地が限られており、環境変化により最近ほとんど確認されていない。

[分布と生態の概要] 本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では太平洋側の南部町から五戸町にいたる丘陵地の草地や林縁に見られる。戦後自生地の採草地やカヤ刈場が中止されるとともにヒメユリも減少に転じた。1980年代にはススキ草原から転じたアカマツ林縁にやっと見出される程度になり、今ではアカマツ林伐採跡地にも出現を見ない。かつては切り花のほとんどが自生品であったといわれる。ススキ草原の刈り取り・火入れにより生存が保たれてきたもので、減少の要因は採取よりも時代の流れによる植生の変化にある。 (根市益三)

単子葉植物 ユリ科

A

和名 クロミノコジマエンレイソウ

環境省：該当なし

学名 *Trillium smallii* Maxim. var. *atropurpleocarpum* Samejima

[形態的特徴] 草丈10～30cmの多年草。茎の頂に3枚の葉を輪生させる。葉は広卵円形で、葉の中心から花柄を伸ばし一個の花をつける、花には3枚の萼と紫色の花弁がある。花弁の数は1枚であったり、2枚であったり、3枚であったりで一定していない。また、花弁の形も大・小、広・細が混じったりしている。さらに、花弁が部分的に雄しべ化していることもある。果実は黒紫色である。

[選定理由] 普通には見られない種で、県内での記録はまれであり、絶滅しないようにしたい。

[分布と生態の概要] これまでは、北海道だけで知られていたが、中泊町(旧中里町)で発見された。しかし、現在は姿を見ることができない。その後、青森市浅虫で見つかっている。株数は少なく、花弁数は3枚、2枚、1枚と、様々である。幾分湿り気のある土地に生育している。

[生存に対する脅威と保存対策] 人里近くの場所なので、開発されて絶滅してしまう懸念がある。生育場所を保護指定して保存することが望まれる。

[特記事項] 花弁が紫色になるエンレイソウ属には、ヒダカエンレイソウ・トカチエンレイソウがある。 (木村啓)

単子葉植物 ユリ科

A

和名 ウラゲキヌガサソウ

環境省：該当なし

学名 *Paris japonica* (Franch. et Savat.) Franch. var. *tomentosa* Miyabe et Tatew.

[形態的特徴] 茎頂に大きい葉が8～10個輪生する多年草。花片は黄白色で8枚ほど輪状となり、輪生葉の中心から立ち上がる。和名のように葉裏に毛がある。

[選定理由] 県内の分布が定かでなかったが、秋田県境付近の相馬地区で群落が確認された。大きく美しい見事な花なので、採取などによる絶滅が心配される。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本だけで、本州の北部と中部に限られている。県内では弘前市相馬地区の一地点のみで、急斜面の谷地に群落を形成している。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育地周辺の樹林が伐採されるなどの環境変化が起こると消滅する。また、採取が重なると絶滅へと向かってしまう。生育地一帯を保存し、採取禁止の処置が必要である。

[特記事項] 日本特産種。青森県北限植物である。 (木村啓)

単子葉植物 ユリ科

A

和名 シロウマアサツキ

環境省：該当なし

学名 *Allium schoenoprasum* L. var. *orientale* Regel

【形態的特徴】 高山の岩場に生える多年草。アサツキによく似ており、高さ15～50cm。葉は円筒形、径3～5mm。花は淡紅紫色、花被片は長さ6～8mm（アサツキは8～10mm）。雄しべは花被片とほぼ同長（アサツキの雄しべは花被片よりずっと短い）。花期7～8月。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。高山生であるが山地にみられる点で貴重である。植生遷移・自然災害により減少の恐れがある。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、朝鮮・サハリン・シベリア（東部）に分布する。県内では白神山地に産する。岩場の岩隙や草地に生える。

(根市益三)

単子葉植物 アヤメ科

A

和名 ヒオウギ

環境省：該当なし

学名 *Belamcanda chinensis* (L.) DC.

【形態的特徴】 山地の草地に生える多年草。茎は高さ60～100cm。葉は剣状でやや粉白色を帯びる。花は放射相称、径3～4cm。花被片は同形同大、橙色で暗赤色の斑点がある。花期7月下旬～8月。種子は黒色で光沢があり「うば玉」、「ぬば玉」と呼ばれる。観賞用とされる。

【選定理由】 産地が限られており、個体数がきわめて少ない。採取や自然災害等により消滅の危険性がある。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州・沖縄、朝鮮・中国・インドに分布する。県内では鯨ヶ沢町と八戸市南郷に希産する。日当たりの岩場の草地に生育する。

(根市益三)

単子葉植物 イグサ科

A

和名 ミクリゼキシヨウ

環境省：該当なし

学名 *Juncus ensifolius* Wikstr.

【形態的特徴】 亜高山帯の湿原や流れのほとりに生える多年草。高さ30～50cm。茎と葉は扁平。葉は幅3～6mm。小頭花は数個つき、球形で径7～10mm。

【選定理由】 高山生の希産種で個体数は少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（中部以北）、千島・北アメリカ北西部に分布する。県内では南八甲田に産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 採取の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ホシクサ科

A

和名 カラフトホシクサ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Eriocaulon sachalinense* Miyabe et Nakai

[形態的特徴] 高層湿原に生える小型の1年草。葉は線形で、長さ4～5cm、幅1mm。花茎は5～10cm。頭花は小さく径2mmぐらい、黒藍色。花は2数性で萼片・花弁・子房・花柱は各2個。雄蕊は4個。

[選定理由] 希産種で個体数は少ない。

[分布と生態の概要] 北海道、本州（青森）、サハリンに分布する。県内では八甲田山に産する。
(細井幸兵衛)

単子葉植物 イネ科

A

和名 タチイチゴツナギ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Poa nemoralis* L.

[形態的特徴] 深山に生える多年草。高さ40～60cm。葉は幅1～2.5mm、最上部の茎葉の葉身は葉鞘の3～4倍長い点で同属の他種と区別される。葉舌は微小である。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州、北半球に分布する。国内での分布はよく分かっていない。県内では南八甲田の路傍の石礫地と十和田湖畔の岩上に生育が見られる。

[生存に対する脅威と保存対策] 花は全く目立たないのが、開発に当たっては注意すべきである。

[特記事項] 館岡亜緒の同定による。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 イネ科

A

和名 オオトボシガラ

環境省：該当なし

学名 *Festuca extremiorientalis* Ohwi

[形態的特徴] 山地に生える多年草。ウシノケグサ類としては大型で高さ70～100cm。地下茎を伸ばし単生または疎生する。葉は幅5～12mm。花序は大きく散開し、まばらに小穂をつけて垂れ下がる。護穎には長さ4～7mmの芒がある。花期6～7月。

[選定理由] 希産種で個体数も少ない。同属の外来種オニウシノケグサとは生態が違い競合は考えられないが、森林の伐採や落葉広葉樹林のスギ植林地化により生育地が失われてきている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、朝鮮（北部）・中国（北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では南部町名久井岳に希産し、谷間の林内に生える。

(根市益三)

単子葉植物 イネ科

A

和名 エゾカモジグサ

環境省：該当なし

学名 *Elymus kurilensis* Probat.

[形態的特徴] 山地の林内に生える多年草。他のカモジグサ類に比べて茎は繊細で、高さ50～100 cm。花穂は細く、彎曲して先が垂れる。小花の基盤に短毛があるのが特徴。花期6～7月。

[選定理由] 産地が限られており個体数が少ない。県内の生育地は地形・地質から土砂崩壊等の自然災害の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・岩手・長野）、朝鮮（北部）・中国（北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では太平洋側の南部町・三戸町に希産する。生育地は馬淵川に面した砂岩地斜面の落葉広葉樹林の林縁である。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 タルマイスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex buxbaumii* Wahlenb.

[形態的特徴] 高層湿原に生える多年草。地下に長い匍枝がある。花茎がまばらに出て高さ30～50 cm。小穂は3～4個。上部に集まってつき、頂小穂だけ雌雄性で他は雌性。

[選定理由] 希産種で、確認された生育地は干拓により産地の消息が不明である。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・長野）、千島・シベリア・中央アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・オーストラリアに分布する。県内では三沢市仏沼（西村 June 8, 1959）に産する。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ジョウロウスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex capricornis* Meinsh.

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。そう生し、茎は高さ40～70 cm。葉は幅4～6 mmで硬い。小穂は茎の上方に集まってつき、長さ1.5～3 cm。果胞は反り返り、狭長披針形、長い嘴の先が2裂して反曲するのが特徴。花期6～7月。

[選定理由] 湿地開発により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内に点在するが、太平洋側の六ヶ所湖沼群・小川原湖周辺に比較的産地が多い。湖沼・湿原の干拓・埋め立て等の土木工事や水害などによる攪乱地に先駆的に出現することもある。姿を消しても条件が整えば出現し消息がつかみにくい。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 クリイロスゲ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carex diandra* Schrank

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。茎は高さ50～80cm。小穂は茎頂に密に集まってつく。果胞は長さ3mm、卵円形で縁辺に小刺があり、革質で熟すと栗褐色となり光沢がある。花期6月。類似種ミノボロスゲ・オオカワズスゲは果胞が4～5mmと大きいので見分けられる。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。生育地周辺の森林伐採・牧草地化等による土砂の流入・水質悪化が生育に影響を及ぼしている。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・秋田・長野・新潟）、北半球北部に広く分布する。県内では東通村荒沼に産し、湿原にツルスゲ・ムジナスゲ・ミツガシワ・タチギボウシなどと共に生育する。八戸市北沼のものは開発により1960年代に消滅した。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 クグスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Carex pseudocyperus* L.

[形態的特徴] 湿地に生える多年草。そう生し、茎は高さ40～70cm。雌小穂は長さ2～5cm、幅6～8mm、點頭する。果胞は長さ4～5mm、熟すと反曲し、口部は2深裂し、裂片はまっすぐでジョウロウスゲのように反曲することはない。花期7月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。水質悪化等の環境変化により危険性が增大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森・群馬・長野）、シベリア・ヨーロッパ・北アメリカに分布する。県内では東通村荒沼と三沢市小田内沼に産し、沼の岸辺に生育する。

[生存に対する脅威と保存対策] 荒沼は付近に原子力発電関係の開発が進行している。寒冷地湿原植物の希少な生育地として全体の保存を考える必要がある。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ヒメウシオスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex subspathacea* Wormsk.

[形態的特徴] 塩湿地に生える多年草。地下茎は横走り群生する。茎は高さ5～20cm。葉は茎より高く伸び、やわらかで幅1～2mm。雌小穂は無柄で直立する。果胞は卵形で灰緑色。

[選定理由] 本州唯一の産地である。開発による危険性が增大している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・ヨーロッパ北部・北アメリカ北部に分布する。県内では太平洋側の六ヶ所村と三沢の高瀬川河口部の塩湿地に産する。ウミミドリ・ヒメキンボウゲ・エゾツルキンバイ・イヌイなどと混生あるいは小群をなして生育する。北岸では干潟公園建設や護岸工事で一部消滅したが、生育状況から踏み付け・車輛立入り・ゴミの堆積がなければ保存可能と考えられる。南岸部は米軍天ヶ森射撃場内にあり立入禁止区域となって保存されている。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 スジヌマハリイ (ヒゲヌマハリイ)

環境省：該当なし

学名 *Eleocharis equisetiformis* (Meinsh.) B. Fedtch.

【形態的特徴】 湖沼などの湿地に生える多年草。匍匐する根茎がある。茎はそう生し、高さ30～50cmやや硬くてトクサのような縦すじがある。*equisetiformis*〔トクサの形をした〕はそこから命名された。小穂は1個頂生する。

【選定理由】 産地が限られ開発等により減少している。

【分布と生態の概要】 本州（中部以北）・九州（北部）、朝鮮・中国東北部・中央アジアに分布する。県内では小川原湖・姉沼周辺に産する。やや砂質の湿地に小群で生育する。休耕田に見られることもある。

【生存に対する脅威と保存対策】 小川原湖周辺の湿地の開発には充分注意すべきである。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 チャボイ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Eleocharis parvula* (Roem. et Schult.) Link

【形態的特徴】 海水の出入りする辺りに生える小型の多年草。マツバイによく似ているが、茎は高さ3～5cm、やや太くてやわらかい。

【選定理由】 海岸開発により生育地が失われてきている。

【分布と生態の概要】 本州・四国・九州、ヨーロッパ・シベリア・北アメリカ・南アメリカ・北アフリカに分布する。県内では尾駁沼・鷹架沼・高瀬川流出口付近に産する。満潮時に海水に浸り、干潮時には露出する平坦な砂泥地に小群で生育する。

【生存に対する脅威と保存対策】 目立たない植物であるが、産地の限られた貴重種であることを啓発し、開発にあたって十分注意する。

【特記事項】 1999年尾駁橋の上流部のチャボイの群生地が浚渫されていた。ここは国内で最も確実な産地である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ヒメワタスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Scirpus hudsonianus* (Michx.) Fernald

【形態的特徴】 稈は高さ10～30cm、刺針は6個、糸状で花後は白色で著しく伸びる。

【選定理由】 産地が限られ個体数が少ない。

【分布と生態の概要】 北海道・本州（北部）、朝鮮北部・千島・北半球の北部全般に分布する。県内では八甲田山に産する。

【生存に対する脅威と保存対策】 登山者は、生育環境を破壊しないようにする。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ウシオスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Carex raminskii* Kom.

〔形態的特徴〕 塩湿地に生える多年草。横走する根茎がある。茎は高さ30～50cm。基部の鞘は赤紫色。小穂は3～5個直立してつく。雌花鱗片は紫褐色で中肋が淡緑色。果胞は卵形で凸レンズ状、灰緑色。

〔選定理由〕 本州唯一の生育地で個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャン・アラスカに分布する。県内では三沢市天ヶ森射爆撃場の海水が流入する塩湿地に産する。

〔特記事項〕 この地の1998年と1999年の調査の際にアゼスゲに似た形態のスゲを得た。後日北海道大学所蔵の、カナダ産の標本と比較しウシオスゲと同定した。本州では初記録である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 マシケスゲモドキ

環境省：該当なし

学名 *Carex scitaeformis* Kük.

〔形態的特徴〕 山地の水湿斜面に生える多年草。タヌキランに似ているが、小穂は楕円状円柱形で幅7～8mm。果胞は狭卵形で長さ4～5mm、短い柄がある。

〔選定理由〕 産地が限られ個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 本州（中部以北）に分布する。県内では鱒ヶ沢町芦荻付近の河岸で採集されたのみで藤原陸夫の同定による。

〔特記事項〕 オオタヌキランとも呼ばれる。勝山（2005）はタヌキランとアズマナルコカナガエスゲの雑種と推定している。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 クジュウツリスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex kujuzana* Ohwi

〔形態的特徴〕 草地や明るい林内に生える多年草。根茎は横に這い、茎は疎生して高さ30～60cm。基部の鞘は濃赤紫色であるのが特徴。葉はやや軟らかく、白緑色、幅3～5mm。雌小穂は垂れ下がり、果胞をまばらにつける。果胞は長さ6mm、広倒卵形で、長い嘴がある。

〔選定理由〕 産地が限られ個体数が少ない。1960年代頃から草地の減少により生育地が次第に失われ、最近では落葉広葉樹林に潜在していたのが、伐採跡地に出現するのを見るだけである。

〔分布と生態の概要〕 本州（中部以北）・九州（北部）、朝鮮（南部）に分布する。県内では八戸市に希産する。生育地は採草地・放牧地（1960年）、落葉広葉樹林縁（1975年）、落葉広葉樹林伐採跡地（1996年）と変遷している。分布域は太平洋側の岩手県北にかけて藩政時代に馬の放牧が行われていた範囲である。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 イッポンスゲ

環境省：該当なし

学名 *Carex tenuiflora* Wahlenb.

〔形態的特徴〕 湿原に生える多年草。茎は高さ20～60cm、まばらにそう生する。葉は細く、幅1～1.5mm、灰緑色。茎頂に2、3個密に集まった小穂をつける。小穂は長さ3～6mm、雌雄性で基部に雄花がつく。果胞は長さ3～3.5mm、灰緑色、多数の細脈がある。

〔選定理由〕 産地が限られており、個体数はきわめて少ない。生育地の湿原にはハンノキなどの木本類の進入が目立ち、消滅の危険性が增大している。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（青森・栃木・長野）、北半球に広く分布する。県内では三沢市仏沼に産する。仏沼は干拓されてしまったが、かつて周辺に発達していた湿原がわずかに残っている。イッポンスゲはそのミズゴケ湿原にツルコケモモと一緒に生育する。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 オクタマツリスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Carex filipes* Franch. et Savat. var. *kuzakaiensis* (M. Kikuchi) T. Koyama

〔形態的特徴〕 山地に生える多年草。タマツリスゲの変種とされる。茎は高さ30～60cm。葉は一部は越年して残る。果胞の嘴が短いのが特徴である。

〔選定理由〕 希少種で個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 本州（東北地方）に分布する。県内では川内町に産する。岩手県区界の標本に基づいて記録されたが、岩手県でも他の産地はない。川内町で大きい株が一度見つかっただけで詳しいことは解っていない。適潤な陽地に生える。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ハタベスゲ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Carex latisquamea* Kom.

〔形態的特徴〕 湿り気のある所に生える多年草。全体に毛のあるのが特徴。ややそう生し高さ40～70cm。基部の鞘は赤褐色。葉は幅3～6mm。果胞は硬い膜質、卵形で長さ5～6mm、脈があり、無毛、先は嘴となる。

〔選定理由〕 希産種で個体数も少ない。1960年代頃から生育地の牧野・採草場が放置され遷移が進んで減少し、さらに養鶏場・養豚場の進出により沢沿いのものは消息不明となっている。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（中部以北）・九州、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では太平洋側の八戸市・三沢市に産する。湿地周辺や流れのほとりに生育する。分布域はクジュウツリスゲと同じく、かつて牧野の展開していた範囲である。1978年に同じ分布域の岩手県洋野町の放牧地でサクラソウとともに小群をなしているのを見たが、今はそこも落葉広葉樹林に遷移し、わずかに残るだけである。

(根市益三)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 ホソバオゼヌマスゲ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carex nemurensis* Franch.

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。密にそう生し、茎は高さ40～70cm。葉は幅2～3mm。小穂はやや離れてつき、栗褐色でやや光沢があるのが特徴。

[選定理由] 希産種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内ではつがる市（旧車力村牛瀨）で井上守が採集した（June 2, 1970）以外に記録はない。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 カヤツリグサ科

A

和名 チシママツバイ

環境省：絶滅危惧II類

学名 *Eleocharis acicularis* (L.) Roem. et Schult.

[形態的特徴] 水田などに生育する普通のマツバイによく似ており、外観では区別できないが、刺針が1～3個で果より短い（マツバイは刺針が3～4個で果より長い）。マツバイの母種になっているが、進化上はマツバイから変わったものであろう。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州・四国、北半球の暖帯から温帯に広く分布する。県内では六ヶ所村市柳沼で確認されただけであるが、精査すれば他にも発見される可能性がある。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ミスズラン

環境省：絶滅危惧IA類

学名 *Androcorys japonensis* F. Maekawa

[形態的特徴] 亜高山帯の針葉樹林下に生える。茎は高さ7.5～9cm、地下に塊根があり、基部は鞘葉に包まれる。葉は1個つき長さ2～3cm。花は淡緑色で穂状に数個つく。

[選定理由] 希少種で個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 本州（青森・栃木・群馬・長野・静岡）に分布する。県内では八甲田山のアオモリトドマツ林下に生育が確認された。本州（八ヶ岳・浅間山・八甲田）の高所にまれに産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 林道の開発に際しては十分注意を要する。必要に応じ移植を考える。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 サルメンエビネ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calanthe tricarinata* Lindl.

【形態的特徴】 草丈30～50cmの多年草で、葉は3、4枚束生して立ち、束生葉の中心から花茎を直立させる。花茎の上方に花を8～15個総状に着ける。花色は、萼片と側花弁は黄緑色、唇弁は朱紅褐色をしている。唇弁の朱紅褐色が、猿面を思わせるのが特徴である。

【選定理由】 40年ほど前までは県内各地の落葉樹林下に普通に見られたのだが、近年は急激に減少している。これは、人による採取が大きな原因である。早急に、絶滅の危機を訴えなければならない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本・中国・インド北部である。日本での分布は北海道・本州・四国・九州のブナ帯落葉樹林下である。県内では、人による採取がなされていない場所では群生が見られるが多く地域では姿が見られなくなっている。

【生存に対する脅威と保存対策】 鑑賞用として人気が高いので、採取が続くものと思われる。採取をしない風潮を高める必要がある。また、園芸上大量に栽培して、広く普及させることも必要と思われる。

【特記事項】 越冬葉は長く地面に伏しているの、花の時期でなくとも種が特定され、採取のおそれがある。
(木村啓)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ヒメホテイラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Calypso bulbosa* (L.) Oakes

【形態的特徴】 針葉樹林下に生える多年草。葉は1個、長さ2.5～4.5cmほどの卵状楕円形、裏面は紫色を帯びる。花茎は10cm前後、先端に紅紫色の花を1個咲かせる。花を正面から見た時に2裂した距の先端が唇弁より下に突き出ないことでホテイランと区別される。花期5月上旬。

【選定理由】 ヒバ(ヒノキアスナロ)林の伐採が進んで生育地が次第に失われるとともに、盗掘のため激減している。

【分布と生態の概要】 北海道(西南部)・本州(青森)、世界的にはシベリア・ヨーロッパ・北アメリカなどに広く分布する。日本での分布域は狭い。県内ではヒバ林にしばしば産するが、かつてのような群生は見られなくなっている。
(齋藤信夫)

単子葉植物 ラン科

A

和名 トケンラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cremastra unguiculata* (Finet) Finet

【形態的特徴】 草丈30～40cmの多年草。葉は根から2枚出て、多くは地面に伏している。花茎は直立して上方に7、8個の花を総状にまばらに着ける。花被片は線状で半開し、黄色で淡い褐色を帯び、紫色の斑点を散らしている。

【選定理由】 深山の落葉樹下に生育しているが、年々個体が少なくなっていて、現在ではほとんど姿を見ることが出来ない。

【分布と生態の概要】 世界的分布は日本のみである。日本での分布は北海道・本州・四国。県内では、西郡と南郡と上北郡に知られるのみである。落葉樹林下にわずかに見られる。

【生存に対する脅威と保存対策】 鑑賞価値の高い希産種のランであるため、掘り取られることが多い。産地を伏せて保存することが必要である。

【特記事項】 同属のサイハイランと似ているがより美しい。トケン(杜鵑)はホトトギス(杜鵑)の音読みである。花被に斑点があり、杜鵑の腹部を思わせる。
(木村啓)

単子葉植物 ラン科

A

和名 アツモリソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cypripedium macranthum* Sw. var. *speciosum* (Rolfe) Koidz.

[形態的特徴] 山地に生える多年草。茎は高さ20～40cm。葉は互生し長楕円形、長さ8～20cm。

花は茎頂に1個つき淡紅色、径3～5cm。側萼片は2枚合着する。唇弁は袋状で球形。花期6月。

[選定理由] 草地の減少により生育地が失われるとともに、乱獲が加わって激減した。

[分布と生態の概要] 本州（中部以北）、朝鮮・中国に分布する。県内に散在していたが現状はほとんど消息不明である。原因は遷移進行・採取もあるが、かつてしばしばみられた山の斜面の採草地・放牧地および疎林地が、戦後馬の飼育が行われなくなって放置されるにいたり、格好の生育地が失われたものと考えられる。

(根市益三)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ヒロハツリシュスラン

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Goodyera pendula* Maxim. var. *brachyphylla* F. Maekawa

[形態的特徴] 深山の樹幹などに着生する。茎は下垂する。葉は狭卵形または卵形、ツリシュスランより短くて幅が広いところから和名がきている。花は白色で一方にかたよって多数つく。

[選定理由] 希産種で森林の伐採や採取により減少している。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）に分布する。県内では津軽半島・下北半島・十和田山系に産する。ブナなどの古木に着生する。

[生存に対する脅威と保存対策] ブナの古木の保存と採取の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 フジチドリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Gymnadenia fujisanensis* Sugimoto

[形態的特徴] 山地の樹幹上に着生する小型の多年草。茎は斜上し高さ6～8cm。葉は根元近くに1枚つき、披針状楕円形、長さ4～5cm。花は3～5個まばらにつき、淡紅色、長さ5～6mm。唇弁は舌状で、小さな側裂片がある。花期7月。

[選定理由] 希産種であり個体数も少ない。深山の森林伐採の進行、マニアによる盗掘などで激減している。

[分布と生態の概要] 本州（青森・秋田・岩手・神奈川・静岡）に隔離分布する。県内では奥羽山系と白神山地に希産する。深山の大木の樹幹および枝上にコケ類やシダ植物とともに着生する。空中湿度がある程度保たれている場所に生育する傾向がある。

(齋藤信夫)

単子葉植物 ラン科

A

和名 クシロチドリ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Herminium monorchis* (L.) R. Brown

〔形態的特徴〕 トンボソウに似ているが、地下に塊根がある。茎は高さ10～15cm。葉は狭長楕円形で茎の下部にふつう2枚つく。花は穂状につき淡緑色で小さい。唇弁は全緑で距がない。花期7月。

〔選定理由〕 希産種で個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州（青森）、朝鮮・中国・ヒマラヤ・シベリア・ヨーロッパに分布する。県内では東通村の石灰岩地のやや湿った草地に希産する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 北海道の釧路では乱獲にあって絶滅したという。花が人目をひかない地味なものがかえってマニアに好まれる傾向があるので、乱獲の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 フガクスズムシソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Liparis fujisanensis* F. Maekawa

〔形態的特徴〕 主としてブナの樹上に着生する。全体がきわめて小さく、高さ3～10cm、葉の長さ1.5～5cm位である。スズムシソウとクモキリソウの自然雑種と考えられる。花期6～7月。

〔選定理由〕 園芸採取により産地・個体数が激減している。

〔分布と生態の概要〕 北海道・本州・四国・九州に分布する。県内では奥羽山系・白神山地・津軽半島・下北半島に産する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 戦後のブナの大規模伐採とその後の乱獲が減少要因である。今後のブナ林の保存と採取の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ヤチラン

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Malaxis paludosa* (L.) Sw.

〔形態的特徴〕 高層湿原のミズゴケの中に生える。茎は高さ5～10cm。葉は2～3枚つき、花後先端にムカゴをつける。花は淡緑色で径約3mm。他のランと違い唇弁が上側にあって直立するのが特徴である。花期8月。

〔選定理由〕 希産種で個体数が少ない。

〔分布と生態の概要〕 北海道、本州（中部以北）、北半球の温体に分布する。県内では八甲田山に産する。

〔生存に対する脅威と保存対策〕 湿原の立入りを監視する必要がある。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 サカネラン

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Neottia nidus-avis* (L.) L. C. Rich. var. *mandshurica* Kom.

[形態的特徴] 草丈20～40cmの腐生植物で、植物体は汚れた黄白色をしている。茎は太く多肉質で直立し、下部には数個の筒状で膜質の鞘状葉を互生、上部には密生した多数の花を総状につける。根茎は地中に直立し、肉質で先が上向する根を束生する。

[選定理由] 自然度の高い落葉樹林下にまれに見られる腐生植物であるが、樹林の伐採などにより、ほとんど見られなくなってしまった。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本・サハリン・朝鮮・中国東北部・シベリア東部である。日本での分布は北海道・本州・四国。県内では、津軽半島・津軽西海岸・八甲田・十和田湖・下北半島に分布するが極めて少ない。自然度が高いミズナラ林などの腐葉土がよく積もっている場所に生えている。

[生存に対する脅威と保存対策] 自然度の高い落葉樹林が失われて来ているので、それに伴ってサカネランも姿を消すことになる。自然度の高い樹林保存が必要である。

[特記事項] 全草無毛のものをエゾサカネラン(var. *nidus-avis*)と呼び、北海道に見られる。

(木村啓)

単子葉植物 ラン科

A

和名 タカネトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Platanthera chorisiana* (Cham.) Reichb. f.

[形態的特徴] 高山帯の草地や湿地に生える。茎は高さ8～15cm。葉は地表近くにつき、2枚接近し広楕円形、長さ2～6cmで厚くて光沢がある。花は黄緑色で径3～4mm、10個内外つく。花期7～8月。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャンに分布する。県内では八甲田山・岩木山に産する。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 イイヌマムカゴ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Tulotis iinumae* (Makino) H. Hara

[形態的特徴] 林床に生える。茎は高さ30cm内外。葉は茎の中ほどにやや接近してつき、長楕円形で長さ8～15cm。その上方に数個の披針形の鱗片葉がつく。花は穂状に多数つき、小さくて黄緑色。花期7～8月。

[選定理由] 産地・個体数が少なく、森林伐採による減少が考えられる。

[分布と生態の概要] 北海道（渡島）・本州・四国・九州に分布する。県内では記録がきわめて少なく、生育環境や生育地など不明な点が多い。

[生存に対する脅威と保存対策] 採取の防止が必要である。

(細井幸兵衛)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ベニシュスラン

環境省：該当なし

学名 *Goodyera biflora* (Lindl.) Hook. f.

[形態的特徴] 草丈8cmで肉質紐状の地下茎が地上に延ばしている多年草。茎の上部に3cmほどの淡紅色花を2、3個つける。葉は卵状楕円形で薄い肉質で、葉柄は茎を包む。

[選定理由] 暖地系植物で本県での分布記録が無かったが1980年6月、十二湖で発見された。以来、各地で探索が続けられているが、他地区では確認されていない。発見時に比べ、数が激減した(木村, 2002)。

[分布と生態の概要] 世界的分布は日本と朝鮮半島。日本では九州から本州の関東西部までが分布の中心である。深山の湿った樹林下に生育している。十二湖ではヒバの林床に姿を見せている。

[生存に対する脅威と保存対策] 花が目立って美しく、希産種であることから採取が心配される。生育地帯への進入を禁止して保存することが必要。

[特記事項] 青森県北限植物。

(木村啓)

単子葉植物 ラン科

A

和名 ヒメミズトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Habenaria linearifolia* Maxim. var. *brachycentra* H. Hara

[形態的特徴] 湿原に生える多年草。よく似たミズトンボより小型で高さ20~40cm。花もひとまわり小さい。唇弁は十字型で、側裂片が水平かやや下向き、中裂片と側裂片がほぼ同長(ミズトンボでは側裂片が湾曲して斜上し、中裂片が長い)。花期6~7月でミズトンボより少し早い。

[選定理由] 産地に限られ個体数も少ない。現在生育地は原子力発電所の敷地内にあり、生存に対して配慮されているが、湿原の富栄養化・木本類の進出等による減少の危険性がある。

[分布と生態の概要] 北海道・本州(青森・群馬・新潟)、千島に分布する。県内では東通村に産し、生育地は海岸後背地の湿原で、戦後付近に入植が行われたが開墾までに至らなかった所で、寒冷地湿原植物群落が残っている。

(根市益三)

単子葉植物 ラン科

A

和名 モイワラン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Cremastra aphylla* Yukawa

[形態的特徴] サイハイランに似てるが、根が肥厚してサンゴ状に分枝し、葉がなくて暗紫色の花茎を伸ばして花を咲かせる。花は花茎より明るい色である。

[選定理由] 希少種であり、乱獲が心配される。

[分布と生態の概要] これまでサイハイランと混同されていたこともあり、分布・生態についてはまだ十分解明されていない。

[生存に対する脅威と保存対策] マニアによる乱獲の防止が必要である。

[特記事項] 学名は佐井村産の生品に基づき新種として発表されたものである。

(細井幸兵衛)

和名 ネムロコウホネ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Nuphar pumilum* (Timm) DC.

[形態的特徴] 池沼に生える多年生の水草である。根茎は肥厚して太く、泥の中を這う。水上葉は根茎の先から出て、長い葉柄があり、水面に浮かぶ。花期は7～8月、径2～3cmの黄色の花をつける。

[選定理由] 産地が限られ個体数が少ない。

[分布と生態の概要] 北海道（東部）・本州（北部）の山地、沼池中に生える。欧州・シベリアに分布する。県内では南八甲田の黄瀬菖の池沼に産する。

[生存に対する脅威と保存対策] 生育環境の維持。採取を防止する。

（細井幸兵衛）